

荒神谷遺跡A-3・4区 全景(東から)



荒神谷遺跡A-3・4区 全景(北から)



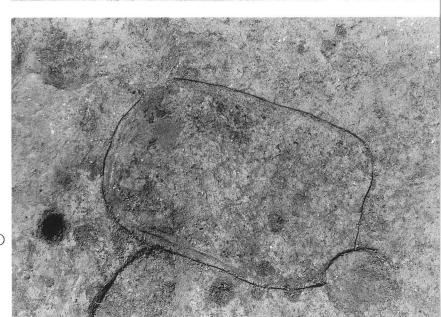
荒神谷遺跡A-3区 SK-01①



荒神谷遺跡 A - 3 区 S K - 0 1 ②



荒神谷遺跡A-3区 SK-01③



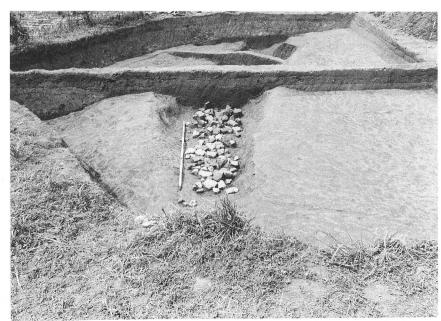
荒神谷遺跡 A - 3区 S K - 0 2①



荒神谷遺跡A-3区 SK-02②



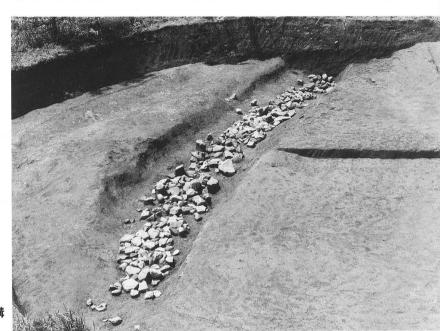
荒神谷遺跡 B 区 調査前の状況



荒神谷遺跡 B - 1区 全景(西から)



荒神谷遺跡 B - 1 ・ 2区 全景(東から)



荒神谷遺跡 B - 1 • 2区 溝状遺構



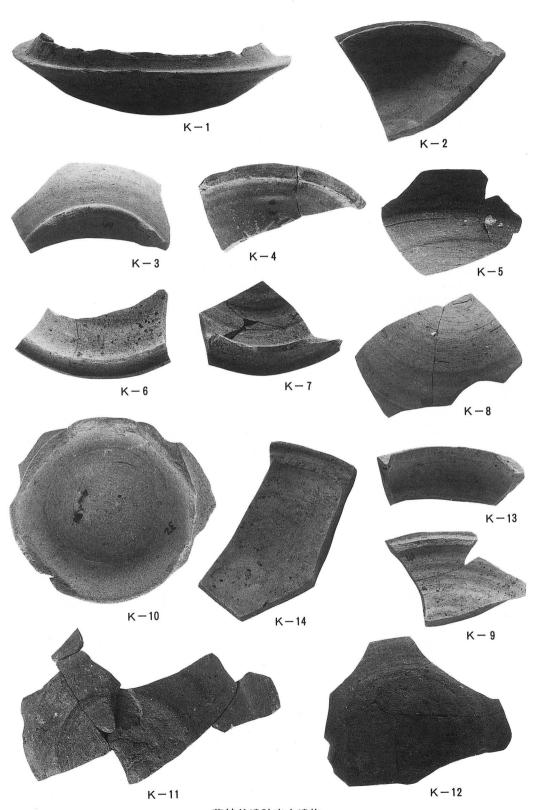
荒神谷遺跡 B - 2区 土馬出土状況①



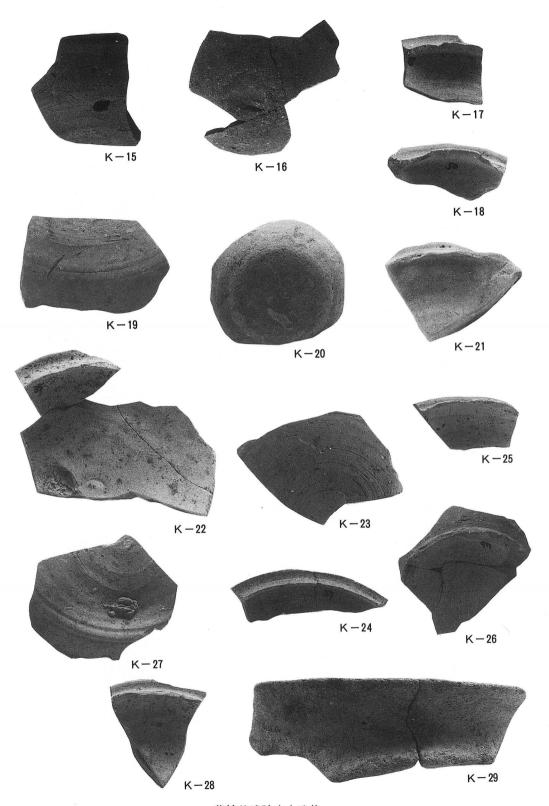
荒神谷遺跡 B - 2区 土馬出土状況②



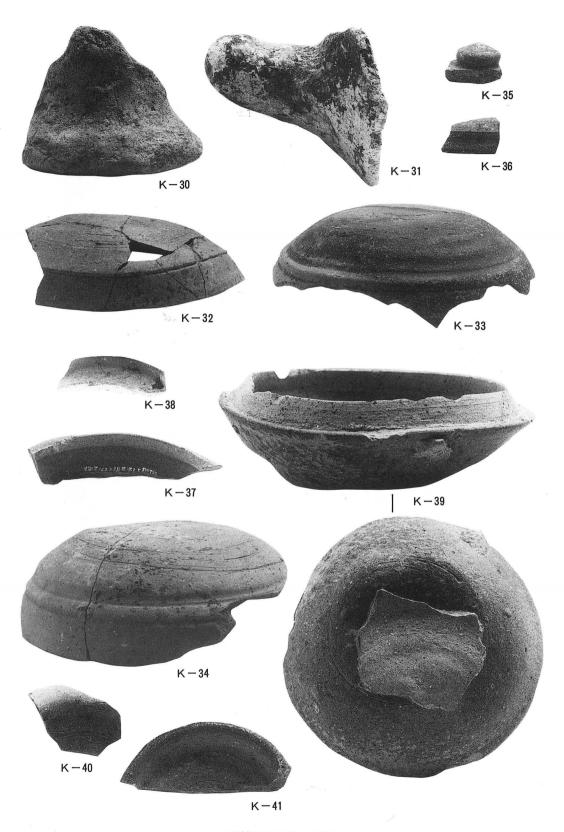
荒神谷遺跡 B - 3 · 4区 全景(調査終了時)



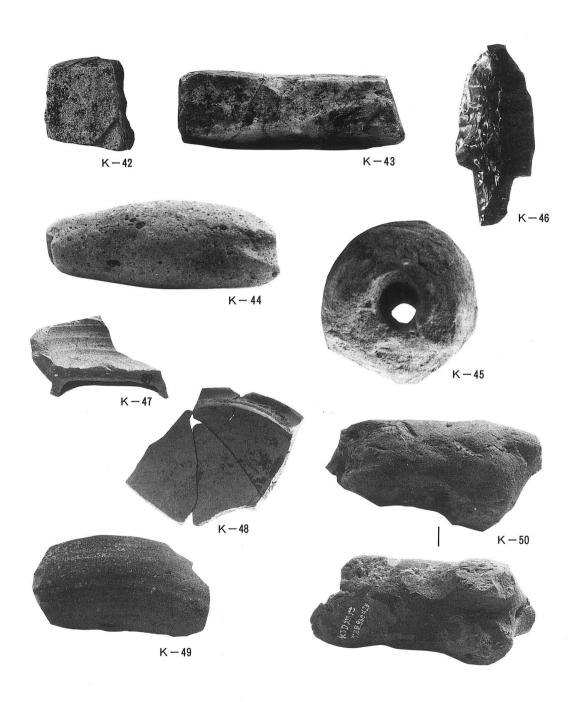
荒神谷遺跡出土遺物



荒神谷遺跡出土遺物



荒神谷遺跡出土遺物



イ ガ ラ ビ 遺 跡



イガラビ遺跡

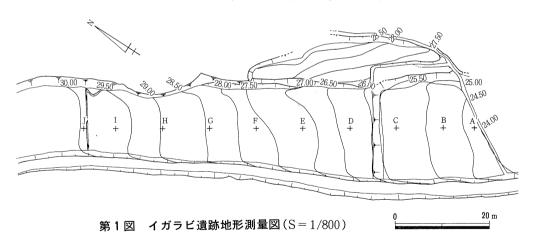
1. 調査に至る経緯

本遺跡は、大井神社の北側に位置する北西から南東に細長く伸びる谷間の東方入り口に立地している。標高は24~30mを測り、以前は畑地として利用されていた。北側低丘陵の中央最高所に池ノ奥1号墳が、その東側緩斜面上に池ノ奥C遺跡、低丘陵東端部には池ノ奥D遺跡が所在する。

この谷間に遺跡があることが判明したのは、松江東工業団地造成事業計画に伴い昭和57年12月に実施した大井地区での分布調査の結果による。すなわち、谷間東方入り口付近に、須恵器片が点々と散布しているのが認められた。そこで、この遺物散布地に、地形に沿って10mグリッドを設定し、全面を発掘して遺構と遺物の検出に務めることにした。

グリッドは、谷間を南北に分割し、東方入り口側から奥に向けて南側を $A-1 \cdot B-1 \cdots$ I-1区、北側を $A-2 \cdot B-2 \cdots I-2$ 区と呼称した。(第1図)

調査は、昭和60年度(8月1日から12月27日までのうち計86日間)、昭和61年度(4月7日から9月16日までのうち計90日間)と2回に分けて実施した。



2. 調査の概要

[昭和60年度の調査]

調査期間および排土の置き場の都合上、 $A-1 \cdot B-1 \cdots E-1$ 区、 $H-1 \cdot I-1$ 区、 $H-2 \cdot I-2$ 区の各グリッドについて調査を実施した。また、C-1区についてはグリッドのほぼ中央に畑の境界を示す石組が南北方向に存していたので、C-1(東)区、C-1(西)区と

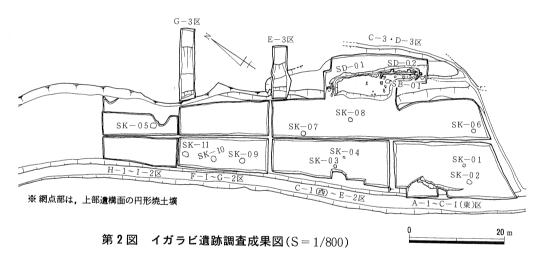
再分区を行った。

調査の結果、上下二つの遺構面を確認し、円形焼土壙5基と多数のピットを検出した。 ピット群からは建物を復元するまでには至らなかった。伴出した須恵器からおよそ7世紀 代から8世紀代頃の遺構と推定された。

[昭和61年度の調査]

昭和60年度の調査において、排土の置き場にした $A-2 \cdot B-2 \cdots E-2$ 区、 $F-1 \cdot G-1$ 区および $F-2 \cdot G-2$ 区の各グリッドについて調査を実施した。さらに、 $C-2 \cdot D-2$ 区北側の緩やかな斜面に、 $C-3 \cdot D-3$ 区を、E-2区および G-2区北側の斜面に、それぞれ E-3区、G-3区の各拡張区を調査の中途で追加した。

調査の結果、上下三つの遺構面を確認し、掘立柱建物址1棟、円形焼土壙6基、またこの他にも、昭和60年度の調査と同様に建物を復元するまでには至らなかったが、ピット多数を検出した。(第2図)



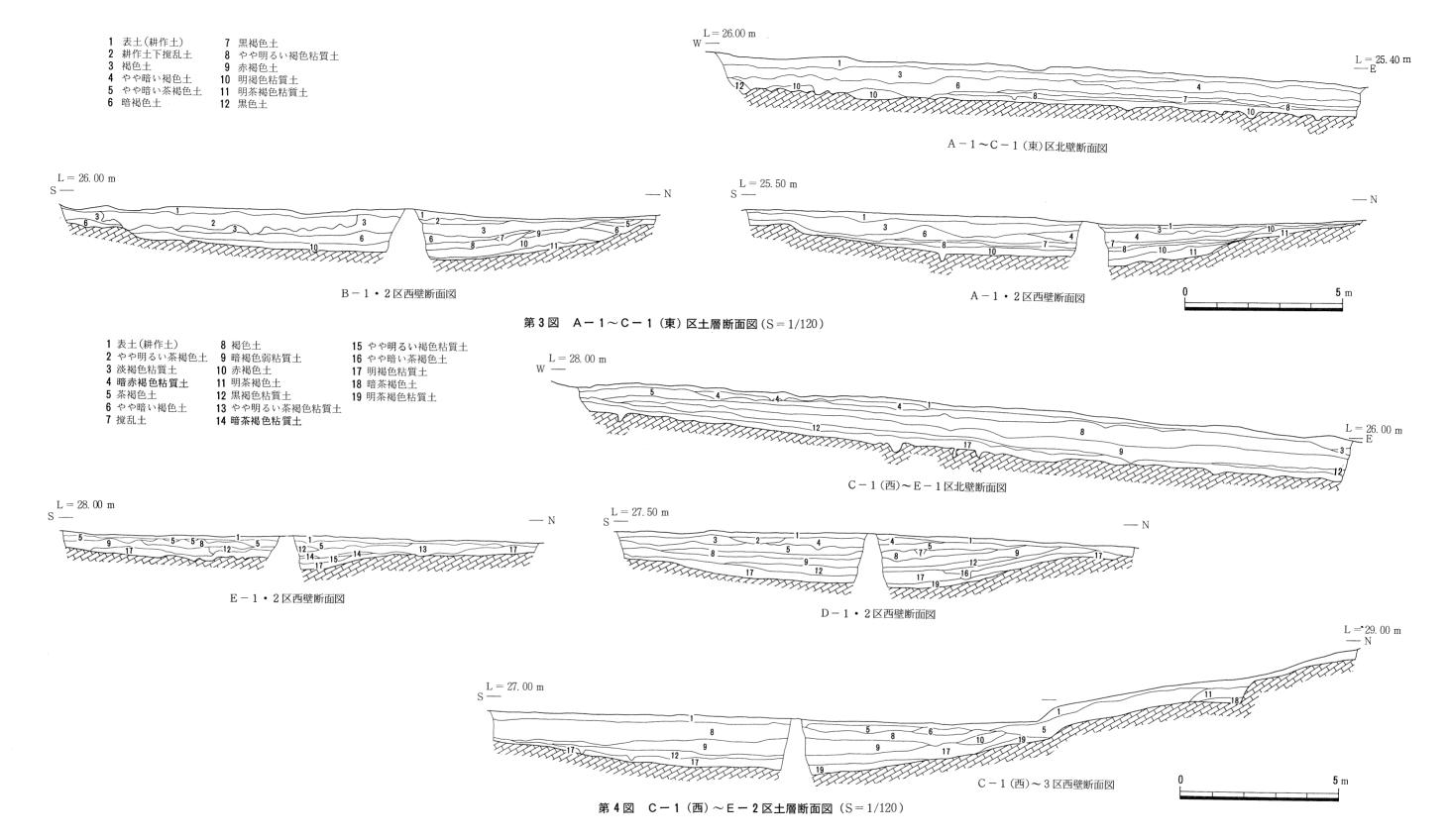
3. 遺構と遺物について

[A-1~C-1(東)区]

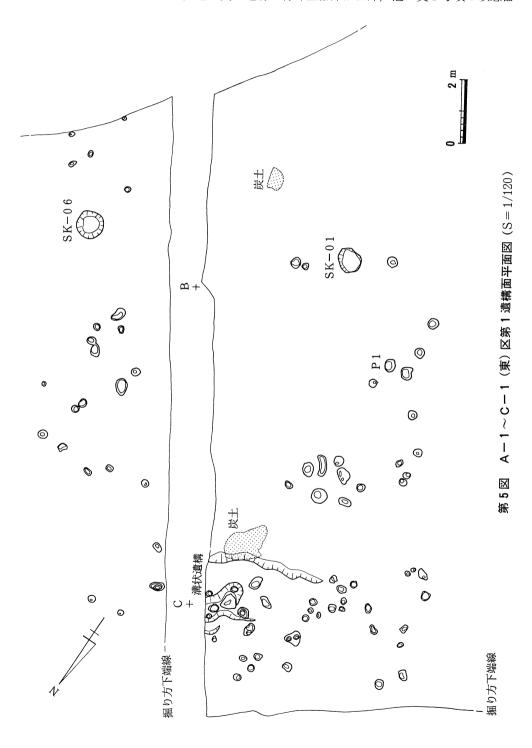
この区域は谷間の東方入り口部分に位置し、次の C-1(西) $\sim E-2$ 区とは石組により画されていて、一段低くなっている。

表土から最下層の地山までの間に、表土を含め12層を数える。深さは谷間中央部の $1 \cdot 2$ 区間畦畔のところで、 $1.0 \sim 1.3$ mを測り、明褐色の地山に達している。 2 区側では、部分的に黒灰色を呈している。(第 3 図)

調査の結果,三つの遺構面を検出した(検出層位が異なっていても,平面的位置がほぼ



同一と思われる遺構については,同一遺構面であろうとみなした)。遺物は,小範囲にしか存していない 5 層, 9 層,12層以外の各層から出土している。また,表土および 7 層黒褐色土までの堆積土層内から,池ノ奥C遺跡の特殊土器片が37片,池ノ奥1号墳の須恵器



- 79 **-**

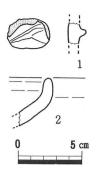
甕片が2片出土している。

○第1遺構面

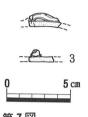
10層明褐色粘質土上面で検出した遺構面である。円形焼土壙 2 基 (SK-01・06)、ピット81穴、炭土 2 所、溝状遺構 1 所を認めた。ピットの形状、法量はまとまりがなく、建物とするには至らなかった。(第 5 図)

覆土内および遺構面上の出土遺物は、須恵器が大半を占めるが、 縄文式土器片2片(第6図1・2)もみられる。後期のものであろ う。P1内からは、土師質土錘(136頁第95図427)が出土している。 また出土した位置は不明だが、やはりピット内から白磁片(第7図 3)も出土している。蓋のつまみと思われ、作りが丁寧なので中国 産とも考えられる。

SK-01 (第8図): 平面プランは楕円形を呈し,上端径 80×65 cm,下端径 70×55 cm,深さ7cmを測る。側壁上部の極一部,および,床



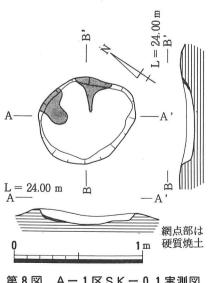
第6図 第1遺構面覆土内出 土縄文式土器 (½)



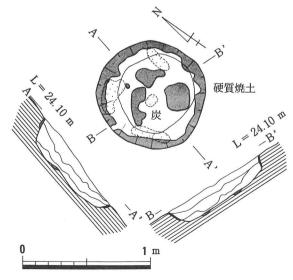
第7図 第1遺構面ピット 内出土白磁 (⅓)

面の一部が固く焼け締まっていた。土壙内の堆積土は、暗褐色土一層で炭が少量混入していたが、遺物はなかった。

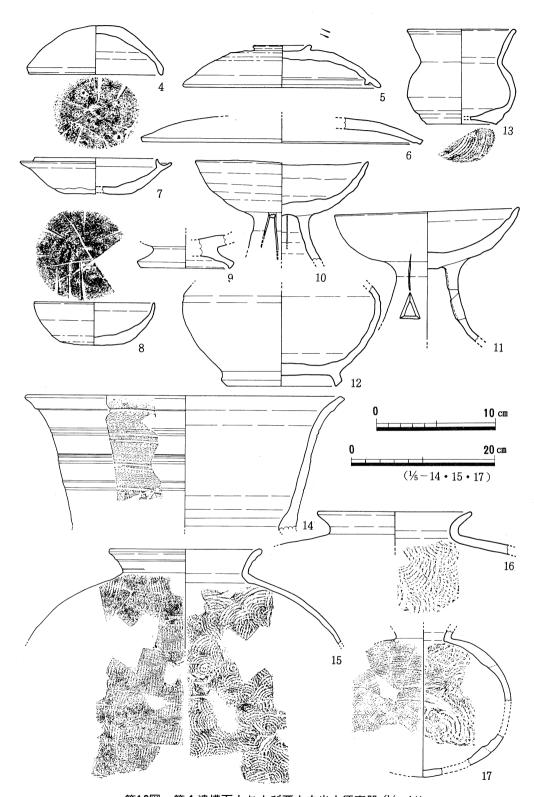
SK-06 (第9図): 平面プランは円形を呈し、上端径88×86cm、下端径70×65cm、深さ20 cmを測る。壁面上部は厚み8~15mm程の固く焼け締まった赤褐色焼土が、床面4か所には厚み7~19mmの青灰色焼土があった。土壙内の堆積土は、上層炭が少量混じった暗褐色土、



第8図 A-1区SK-01実測図 (S=1/30)



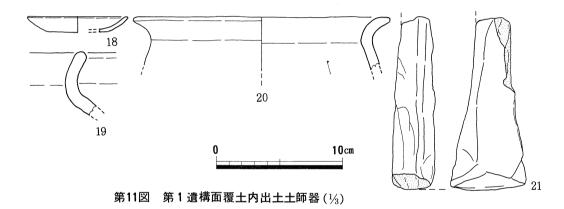
第9図 A-2区SK-06実測図 (S=1/30)



第10図 第1遺構面上および覆土内出土須恵器(⅓,⅓)

中層1cm角ぐらいの炭塊を含む褐色土、下層炭土に分かれた。上層から須恵器片、土師器 片が10数片出土した。

須恵器(第10図)は、蓋・坏・高坏・壺・坩・甕・横瓶が出土している。 $4\sim6$ は蓋で ある。4は天井部内面に「×」印の箆記号を施し、5には天井部外面に箆傷が二つみられ、 輪状つまみを付し口縁端部は丸く、かえりの端部は鋭い。6は口径が23.1cmもある大形品 である。 $7 \sim 9$ は坏である。7 は、立ち上がりが短く内傾している。8 は小形のもので、 底部内面に「×」印の箆記号がある。9は低脚の付く坏であろう。4・7・8は、高広編年 の I A 期か。10・11は高坏で、10は脚部の一方に台形の透しを、他方に箆状工具による切 り込みを有し、11は脚部の二方向に、上段は切り込み下段は三角形の透しを施したもので ある。12は壺で高台を付す。13は坩で、底部に糸切り痕を残している。14・15は大甕で、16 17は横瓶である。



土師器 (第11図) は、小形の坏 (18)、壺・甕類の口縁部 (19・

第12図22は、土馬(須恵質)の脚の一部である。

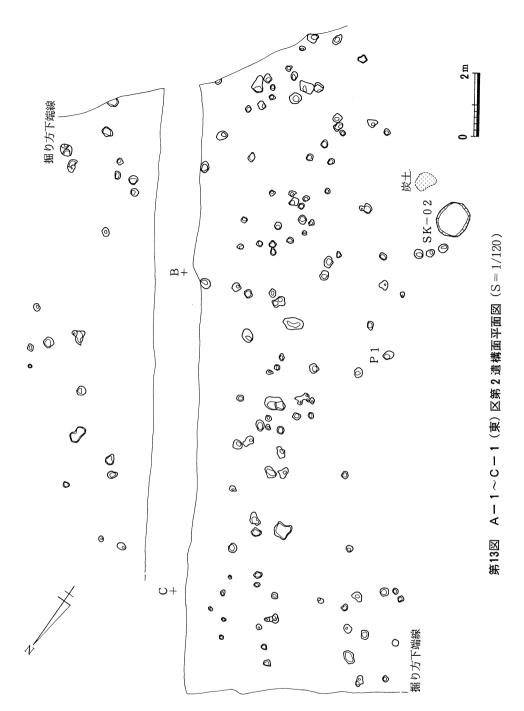
20), 竈片(21) 等が出土している。 土師質の土錘(136頁第95図426)も出土している。

○第2遺構面

第12図 第1遺構面 覆土内出土土馬(1/3)

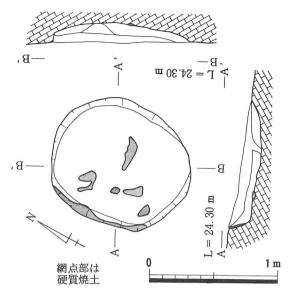
1区側では地山上面、2区側では11層明茶褐色粘質土上面にあたる遺構面である。円形 焼土壙1基(SK-02), ピット134穴, 炭土1所を認めた。ピットの法量は概ね上端径65 $\times 45 \times$ 深さ35cmから、 $14 \times 12 \times 11$ cmぐらいで、形状についてもまとまりがなく、第1遺構 面と同様に建物とするには至らなかった。(第13図)

覆土内および遺構面上からは,須恵器,土師器,石鏃が出土している。またP1内から 土師質の土錘(136頁第95図428),位置は不明であるがやはりピット内から須恵器が出土



している。一本の沈線を巡らし,二方向に二段の切り込みを入れた高坏の脚部(第15図25), および,壺(第15図26)である。

SK-02 (第14図): 平面プランは楕円形をしており、上端径105×87cm、下端径100×80 cm、深さ13cmを測る。西壁上部および床面 5 か所が固い焼土となっていた。土壙内の堆積土は、上層炭化物を含む暗褐色土、中層やや暗い褐色土、下層炭化物混合層の 3 層に分か

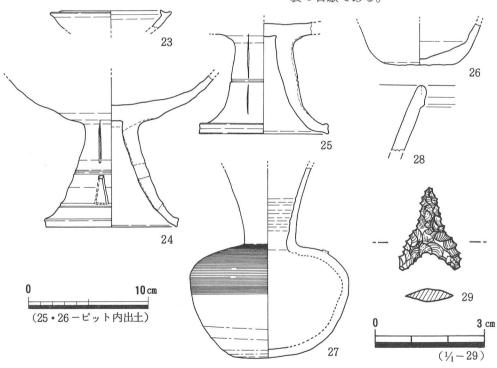


第14図 $A-1 \boxtimes S K-02$ 実測図 (S=1/30)

れた。遺物はなかった。

須恵器では、坏・高坏・壺・甑が出土している。第15図23は小形の坏で、立ち上がりが短く内傾しており、高広編年の『A期か。24は高坏で、脚部中央に沈線を一条巡らせ、二方向に上段は切り込み下段は透しを入れている。27は長頸壺で、体部上半に櫛状工具によるカキ目がみられる。28は甑の口縁部で、突帯部は貼り付けか。

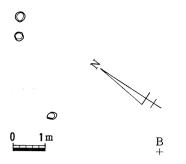
第15図29は,鍬型凹三角形の黒曜石 $^{\pm 2}$ 製の石鏃である。



第15図 第2遺構面上および覆土内出土遺物(⅓, ⅓)

○第3遺構面

B-2区南側の谷底付近の地山面で認められ、上端径25×20cm、深さ15~10cm程度のピットを3穴検出した。地山面上覆土内から須恵器、土師器、縄文式土器が出土しているが、地山面上に遺物はみあたらなかった。(第16図)



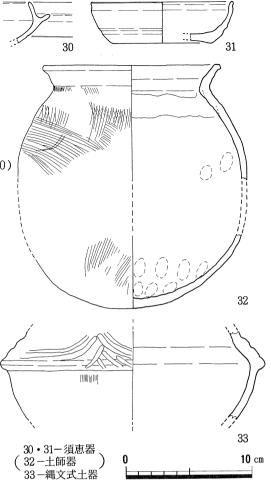
第16図 B-2区第3遺構面平面図(S=1/120)

第17図30・31は須恵器の坏で、30は山本編年の『期、31は高広編年の『A期頃か。32は土師器の壺で、体部全体に刷毛目調整を施している。また土師質の土錘(136頁第95図429)、深鉢型の縄文式土器(後期、第17図33)も出土している。

○表土および堆積土層からの出土遺物

出土遺物には、須恵器、土師器、土馬、 縄文式土器、中世の陶器、鉄製品および 土錘がみられる。

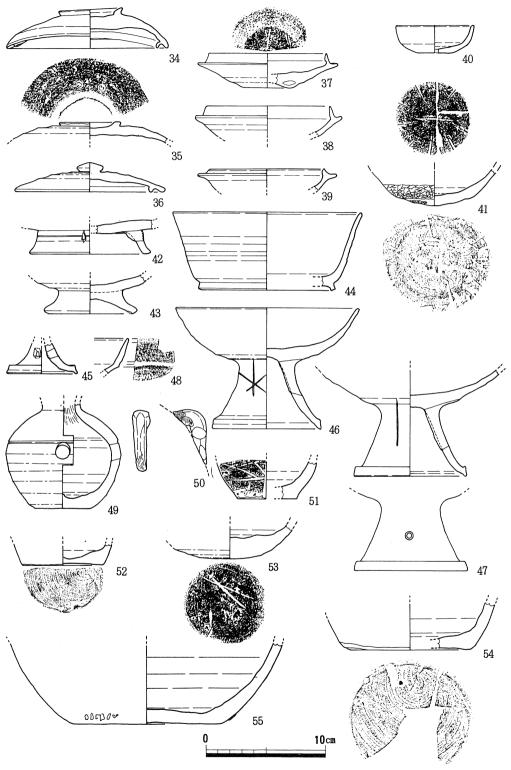
須恵器 (第18~20図) は,蓋・坏・高 坏・嘘・壺・鉢・甑・ミニチュア土製支 脚・甕が出土している。34~36は蓋であ



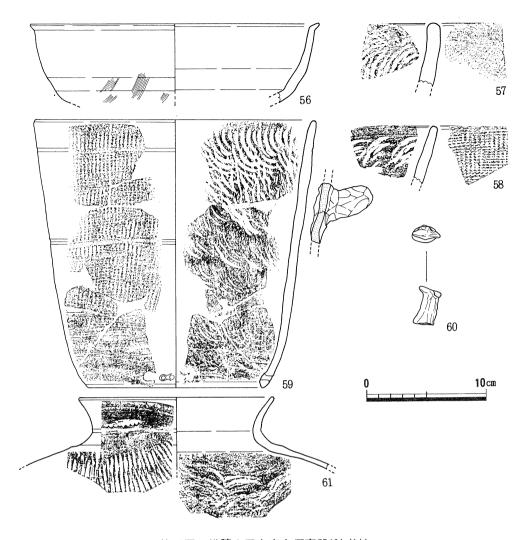
第17図 第3遺構面覆土内出土土器(1/3)

る。34は口縁部内側にかえりがあり、輪状つまみを付す。35は天井部外面に竹菅文が二つ観察され、輪状つまみを付している。36は口縁部内側に大きなかえりがあり、宝珠状つまみを付す。丁寧な作りである。37~44は坏である。37・38の口縁立ち上がりは、やや長く内傾し、端部は少し細く鋭い。37の底部内面には、「一」印の箆記号がある。39の口縁立ち上がりは短く内傾する。40は小形の坏である。41は外面の底部と体部との境目に、胎土とは異なる別の粘土が貼り付けられ一周している。底部内面には「一」印の箆記号がある。42・43は低脚付坏で、42の脚部には4か所(?)に三角形の透しを施している。44は高台付坏である。

45~47は高坏である。45は低脚の高坏で、透しがみられる。46は脚部に貫通している切り込みが一か所あり、その切り込み部分に「×」印の箆記号を施している。47は脚部に切り込み二か所と、竹菅文二か所が観察される。



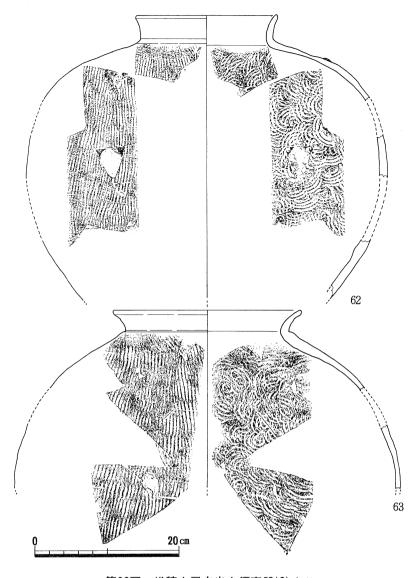
第18図 堆積土層内出土須恵器(1)(⅓)



第19図 堆積土層内出土須恵器(2)(1/3)

50~55は壺である。50は把手の部分である。51・52は小形壺で、51は体部外面下方に、52は底部外面に箆記号を施す。53は底部外面に、「×」印の箆記号がみられる。54は回転糸切り痕を残している。55は外面体部と底部の境目に平行叩き目文が施されている。

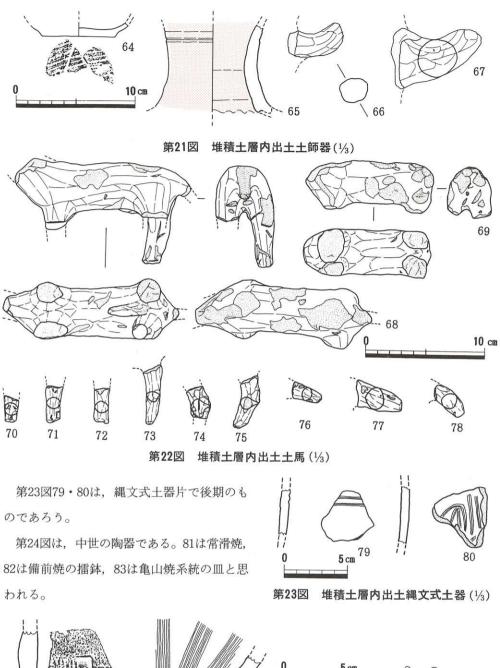
第19図56は,鉢と思われる。57・58は,甑かあるいは鍋の口縁部ではなかろうか。59は甑で,把手を付し,円孔が底部に一か所につき 2 穴穿かれている。60はミニチュアの土製支脚で,須恵質というのが珍しい。池ノ奥A遺跡でも須恵質のミニチュア品が 1 点,さらに,中形品が 1 点出土している。61,第20図62・63は大甕である。61には,口頸部に平行叩きの押し当て具の木口部分が当たった痕がみられる。

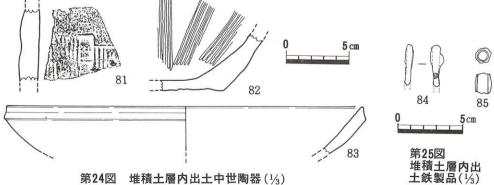


第20図 堆積土層内出土須恵器(3)(1/5)

土師器(第21図)は、坏・壺・把手・甕が出土している。64は小形の坏で、静止糸切り 痕を残す。65は長頸壺の頸部で、内外面ともに赤色塗彩を施している。66・67は把手で、66 は小形品である。

土馬(第22図)は、須恵質のものが出土しており、11点を数える。完形に近いものは1点もない。胴部が2体、脚部が6本、尾が3点で頭部は出土していない。68は裸馬で、頭部、尾、右後肢を除いた3肢が欠損している。尻に箆状工具で肛門孔を穿ち、股間には男根を表現する粘土を貼り付けている。69も裸馬で頭部、4肢、尾を欠損している。尻に1孔を穿ち肛門を表現している。性別は不明である。74・75は、同一個体の脚部と思われ、形態的には馬よりも牛の脚ともみえる。





第25図84・85は、鉄製品である。

土錘は、38点出土している。土師質のものが大半を占めるが、須恵質のものが2点みられる(土師質;136頁第95図390~425、須恵質;137頁第96図494・495)。

註

- 註1 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984年
- 註2 鳥羽市教育委員会『鳥羽贄遺跡』1975年 の石鏃分類法による。
- 註3 山本清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』1971年

[C-1(西)~E-2区]

 $A-1\sim C-1(\mathbf{p})$ 区西側のつづきに位置するが、畑の境界の石組によって一段高くなっている。

表土から最下層の地山までの間, $C-3 \cdot D-3$ 区の拡張区の土層を含めて19層に分けられる。深さは,谷間中央部の $1 \cdot 2$ 区間畦畔のところで, $0.7 \sim 1.8$ mを測る。地山は,E-2区ではやや赤みを帯びているが,明褐色を呈している。 $(77 \sim 78$ 頁第4図)

調査の結果,三つの遺構面を検出した。遺物は、小範囲にしかみられない2層、3層、7層、14層以外の層全てから出土している。また、表土、9層暗褐色弱粘質土までの堆積土層、および、第1遺構面上の覆土である12層黒褐色粘質土内から、池ノ奥C遺跡の特殊土器片が38片も出土している。

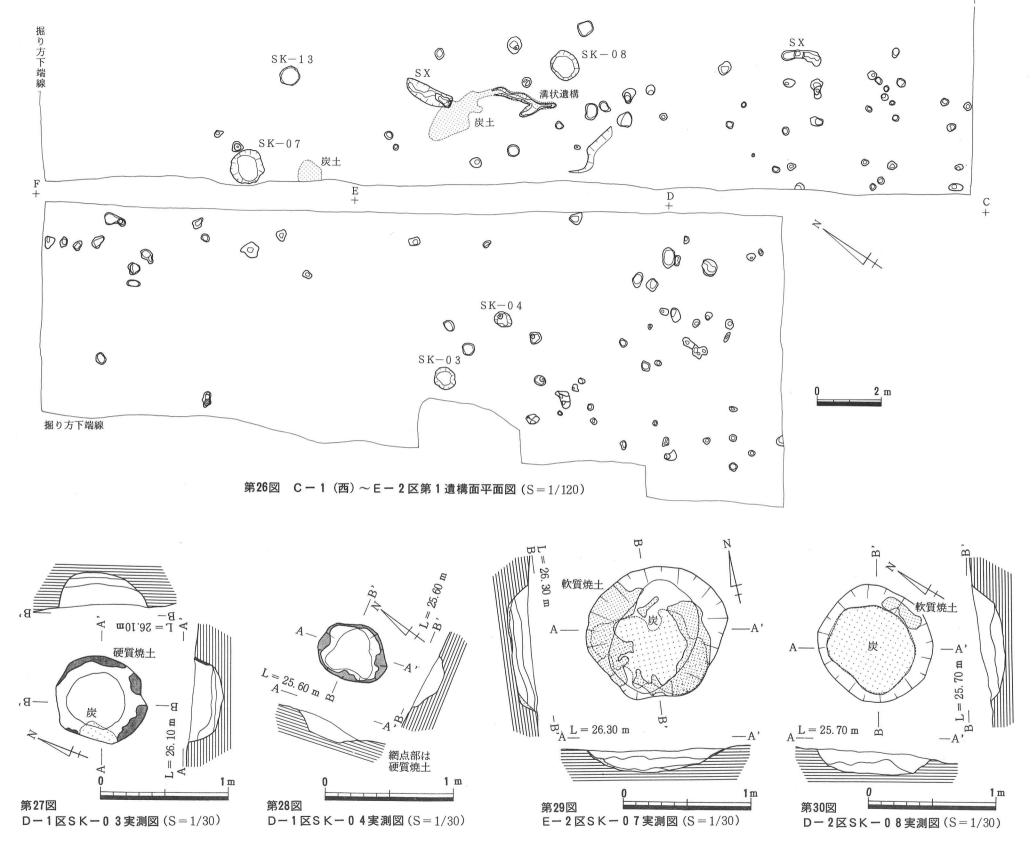
○第1遺構面

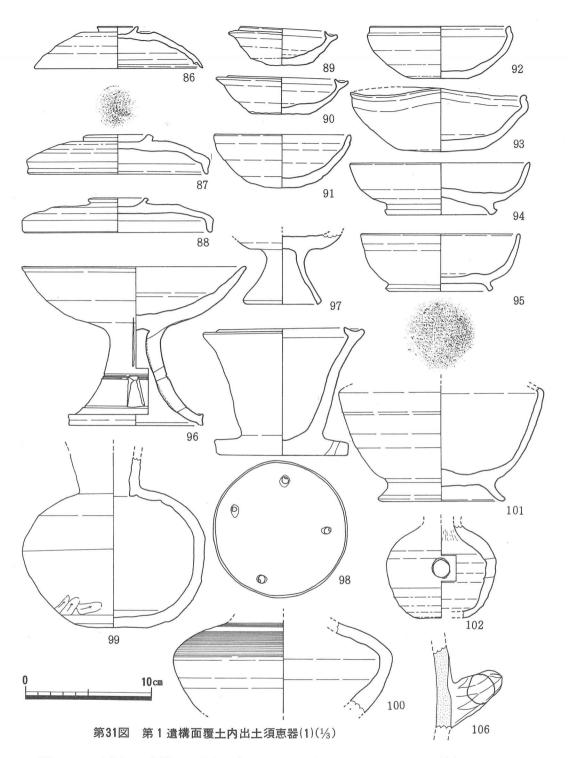
17層明褐色粘質土上面で検出した遺構面で、 $A-1\sim C-1(東)$ 区の第1遺構面のつづきであると思われる。円形焼土壙4基($SK-03\cdot04\cdot07\cdot08$)、円形土壙1基(SK-13)、ピット106穴、炭土2所、溝状遺構1所、性格不明遺構2所を確認した。ピットは、形状、法量ともに大小様々でまとまりがなく、建物とはならなかった。(第26図)

ピット内から、内外面ともに赤色塗彩を施した土師器片(99頁第37図152)、須恵器長頸壺の口頸部片が出土しているが、どのピットかは不明である。

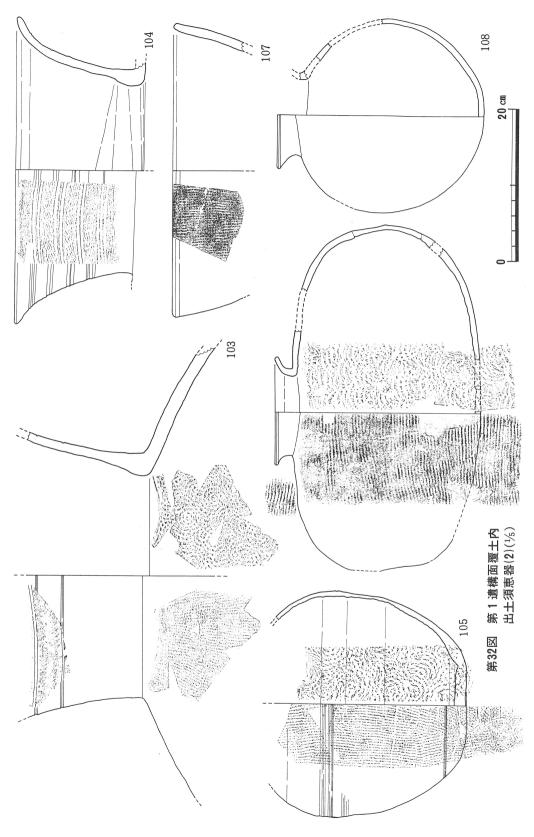
SK-03 (第27図): 平面プランはほぼ円形を呈している。上端径71×66cm, 下端径45×43 cm, 深さ24cmを測り, やや小型である。南側および東側の壁面上部がよく焼け締まっている。土壙内の堆積土は, 上層炭少量含む褐色土, 中層炭を多く含む褐色土, 下層は炭化物層の3層に分かれる。土器片はみあたらなかった。

SK-04 (第28図): 平面プランは楕円形をしている。上端径55×45cm, 下端径38×36cm,





深さ12.5cmを測り、小型の円形焼土壙である。壁面はよく焼けているが上縁部だけである。 床面に焼土はなかった。土壙内の堆積土は暗褐色土一層で、炭が混じっていた。土器片は 入っていなかった。



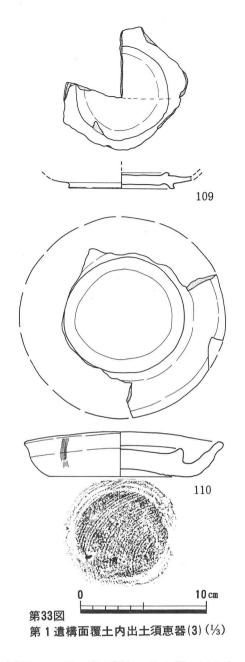
- 94 -

SK-07 (第29図): 平面プランは楕円形をしている。上端径90×85cm, 下端径55×42cm, 深さは19cmを測る。東西両側の壁面から床面の一部に軟質の青黒色焼土が残っており,厚さは東側壁面下端で最大50mmを測る。土壙内の堆積土は4層に分かれ,上層礫混じりの暗赤褐色土,中層ブロック・炭混じりの黒灰褐色土,下層炭・灰を多量に包含した黒灰色土,最下層赤褐色土であった。土器片は入っていなかった。

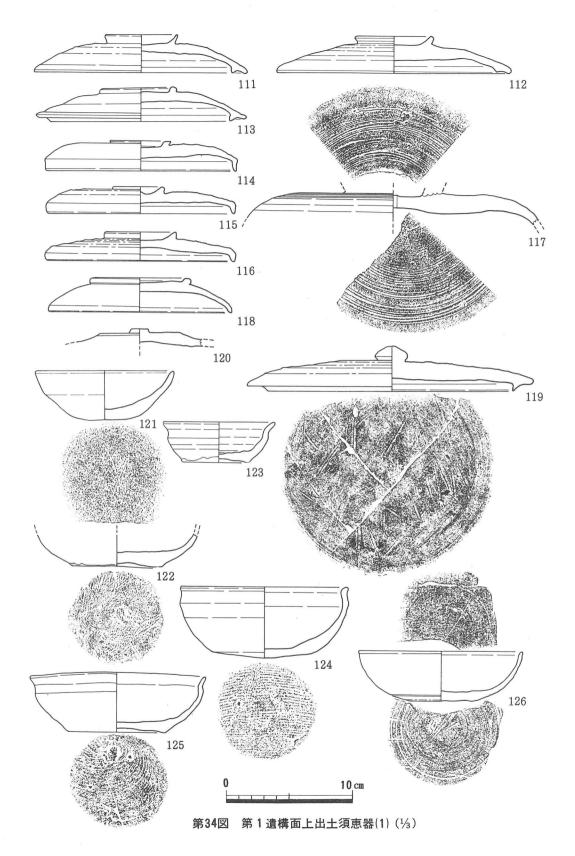
SK-08 (第30図): 平面プランはやや楕円 形を呈している。上端径90×85cm, 下端径55 ×42cm, 深さは19cmを測る。壁面はあまり焼 け締まっていなく, 床面にも焼土はなかった。 土壙内の堆積土は, 上層炭化物・礫混じりの 暗灰褐色土, 下層炭土の2層に分かれた。土 器片はみあたらなかった。

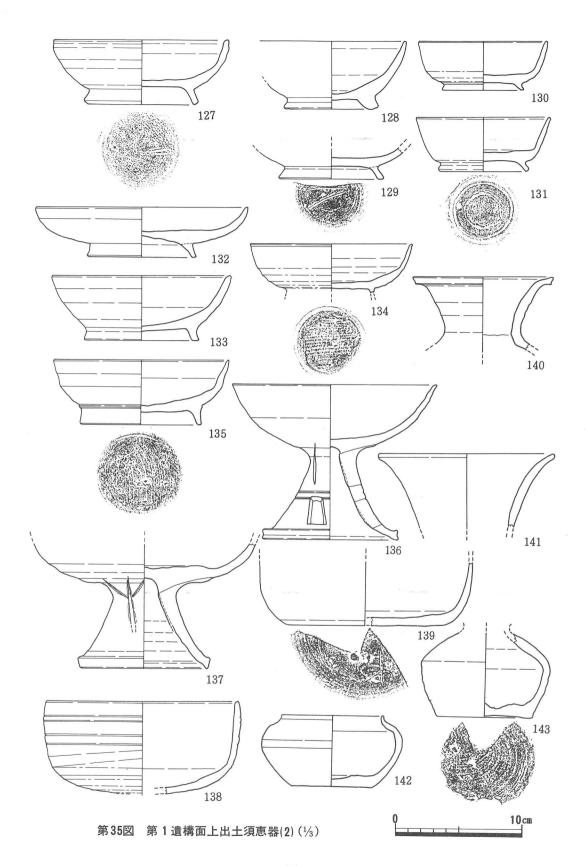
覆土内および遺構面上から, 須恵器, 土師器, 石鏃, 中世の陶器片が出土している。

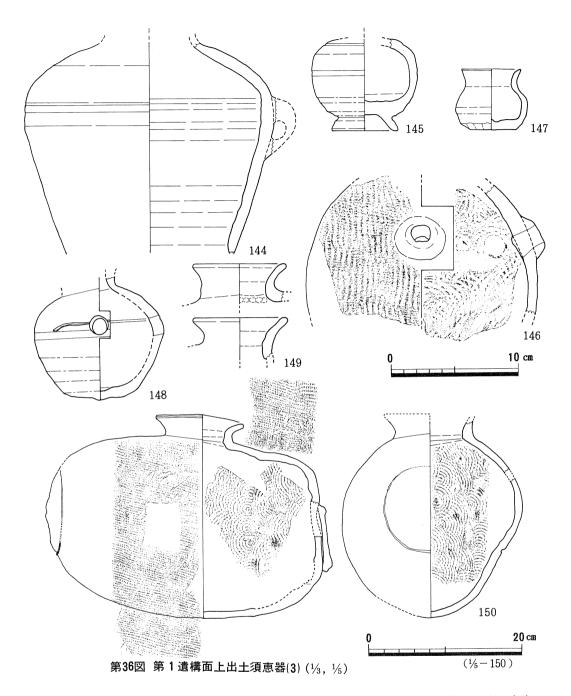
第31~33図は覆土内から出土した須恵器であり、蓋・坏・高坏・鉢・壺・鴎・甕・把手・甑・横瓶がみられる。86~88は蓋で輪状つまみを有し、86は口縁にかえりが短く付き、87・88は口縁部が短く直立するもの。89~95は坏



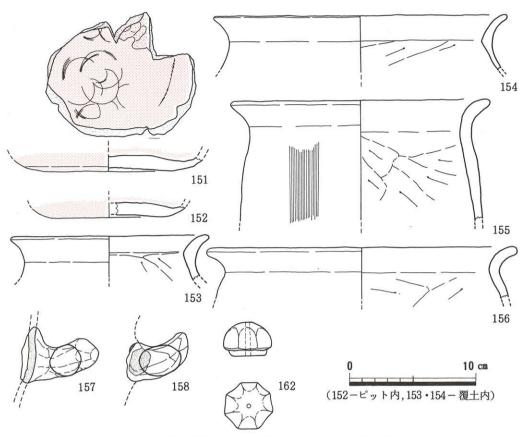
である。89・90は小形の坏で立ち上がりは短く内傾している。高広編年の IA期。91も小形の坏で、半球状を呈している。やはり高広編年の IA~ IB期か。92・93は、口縁部が屈曲しており、93の底部は静止糸切り後ナデ調整を施す。高広編年の IA~ IB期か。94は高台付坏である。95の底部外面には、「一」の箆記号がある。高広編年の IB~ IV A期か。96・97は高坏で、96の脚部には三条の沈線と、上段は切り込みに過ぎないが二段二方向の透しがみられる。98はジョッキ型の鉢か。底部を円盤状の台座にして安定させ、体部から口縁は朝顔状に開き、口縁部の立ち上がりは短く内傾している。台座(底部)外面よ







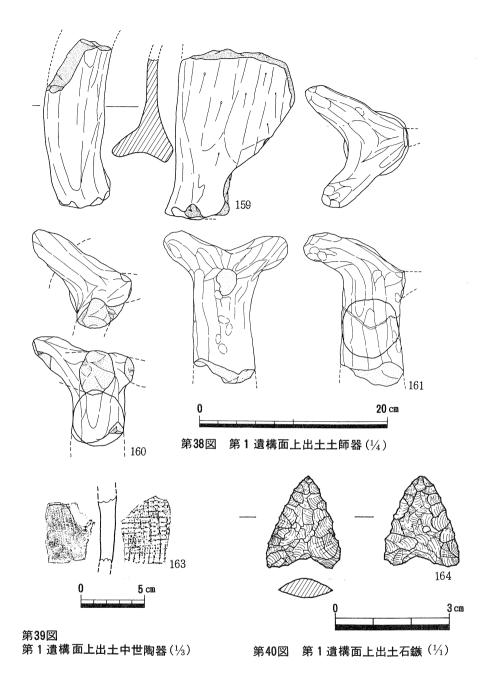
り外上方へ向けて、4か所穿孔している。台座に円孔はないが類似した土器が、池ノ奥窯跡群の灰原地区(表採)、近くの薦沢A遺跡、および、安来市の高広遺跡から出土している。この4か所の円孔は、どのような意味を持っているのだろうか。 $99\sim101$ は壺である。 $99\cdot100$ は長頸壺で、101は高台を付している。102は 中面に自然釉が付着している。第32図 $103\sim105$ は甕である。第31図106は甑か鍋の把手と思われる。先端部に切り込みを



第37図 第1遺構面上および覆土内出土土師器 (1/3)

入れている。第32図107は甑か鍋の口縁部。108は横瓶で,肩部に「×」印の箆記号がみられる。第33図109は托と思われる。110は円面硯か。陸部に使用痕跡は認められず,一定方向の静止ナデがみられる。底部外面には静止糸切り痕を残す。

第34~36図は遺構面上出土の須恵器である。111~113は、輪状つまみを有し口縁内面のかえりが付く蓋である。高広編年の II A~II B期。114~116は、輪状つまみを有し口縁部が短く直立するもので、高広編年の II B~IV A期か。117は大形の蓋で、輪状つまみが剝離した痕があり、天井部中心に円孔を穿き、内外面に櫛状工具によるカキ目調整が施されている。円孔の意味は不明である。118も蓋と思われ、口径の大きな輪状つまみを有し、静止糸切り痕を残している。119は大形の蓋で、宝珠状のつまみを有し口縁内面のかえりは鋭い。高広編年の II A期か。120は、乳頭状のつまみを有する蓋である。121~126は、無高台の坏である。121は高広編年 II A期の坏か。122の底部内面には、「丄」印の箆記号がみられる。123は小形の坏である。124・125は静止糸切り痕を残す。高広編年の II B~IV A期か。126には、底部と体部の境目に箆状工具による沈線状のものが、一~三条施さ



れている。第35図127~135は高台の付く坏である。127・129は底部外面に箆記号が施されている。134・135には、静止糸切り痕がみられる。136・137は高坏である。脚部に、136は二条の沈線と二方向の上段切り込みで下段は台形の透しを施し、137は二方向に切り込みを入れ、片側は「ヤ」形を呈している。138は鉢で、四条の沈線を施している。139も鉢で、底部外面に「丄」印の箆記号がある。140~143、第36図144~146は壺類である。140・141は、長頸壺の口頸部である。142は短頸壺である。143の底部は、静止糸切り後ナデ調

整を施している。144は長頸壺の胴部で鈕の剝離痕がみられる。145は高台の付く小形壺で ある。146は,胴部に円孔があるが意味不明。第36図147は坩で,底部から上 1 cm弱ぐらい までの間に、粗い箆削りの痕がみられる。148は嘘で、胴部上半に一条沈線が入るが一周 していなく中途で切れている。粗雑な感じで焼成不完全か。149は提瓶の口頸部か。150は 横瓶であるが,非対称で全体に大きく歪んでいる。肩部に「×」印の箆記号がある。

第37・38図は,遺構面上および覆土内から出土した土師器で,内外面ともに赤色塗彩を 施し暗文を入れた坏,甕・把手・竈・土製支脚がみられる。また,第37図162は土師質の 土製品で、つまみあるいは栓のような形状をしており、上部は8面取りをし中央部に円孔 が上下に貫通している。

第39図163は、中世の陶器片で亀山焼系統のものであろう。

第40図164は、鍬型凸三角形をした黒曜石製の石鏃である。

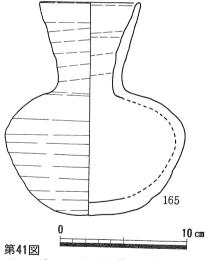
○第2遺構面

1区側では地山面、2区側では19層明茶褐色粘質土上面にあたる遺構面である。やはり、 A-1~C-1(東)区の第2遺構面のつづきであると思われる。ピット71穴を検出した。こ のピット群は不規則に並び形状,法量もともに大小様々であり,建物とするには至らなかっ

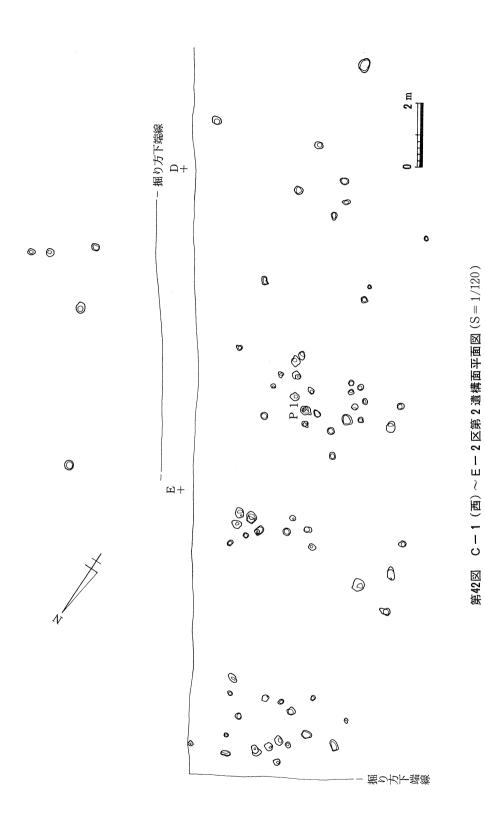
た。ピットの法量は最大25×30×30cmから、最小15×15 ×10cmであった。P1内から、ほぼ完形に近い須恵器 長頸壺(第41図165)が出土した。(第42図)

覆土内からは、須恵器と少々の土師器が出土してい る。しかし、この遺構面上からはP1内出土の須恵器 長頸壺以外には少量の土器片しか出土していない。

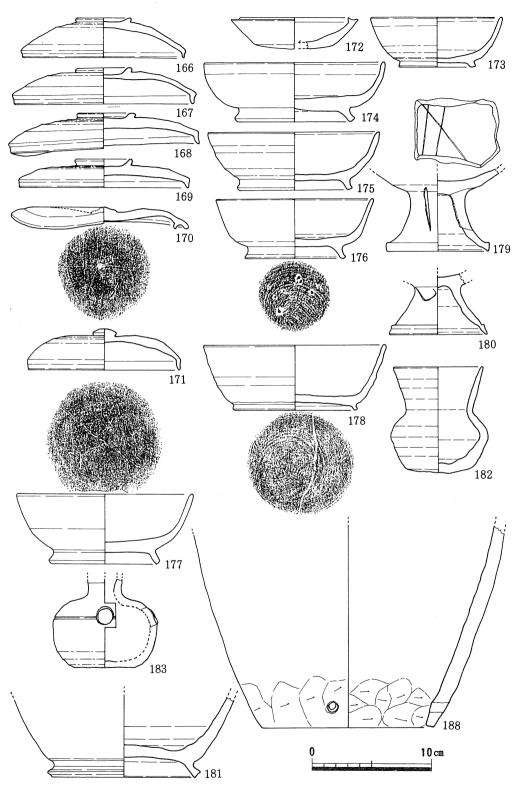
須恵器(第43・44図)には、蓋・坏・高坏・壺・坩・ **璲・甕・甑がみられる。166~169は蓋で、輪状つまみ** を有し口縁部が短く直立するもの。169の外面は他の 土器を重ねられなかったところが赤茶灰色に発色して いる。高広編年の■B~NA期。170は口縁内面のか 第2遺構面P1内出土須恵器(⅓)



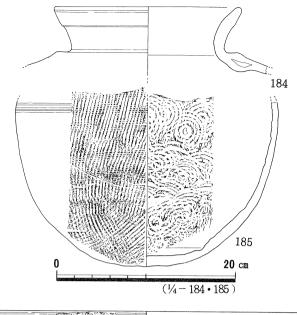
えりが付き、天井部内面に「×」印の箆記号があり、171は口縁部が短く直立し、ともに 宝珠状つまみを有するもの。172は無高台の坏で、立ち上がりが短く内傾するもの。173~178 は、高台の付く坏である。176は、底部外面に静止糸切り痕を残すもの。177は、底部内面 に「×」印の箆記号がみられる。178は高台が底部と体部の境目付近に付き、体部は直線 的に開いている。底外面に回転糸切り痕を残し,高台を貼り付けた時についたと思われる

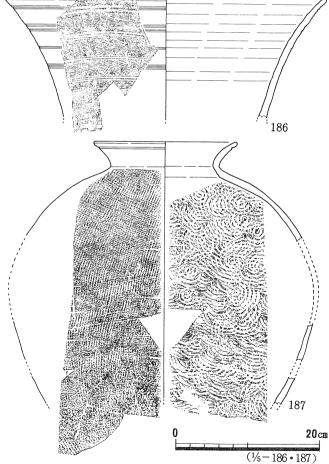


- 102 -



第43図 第2遺構面覆土内出土須恵器(1)(⅓)

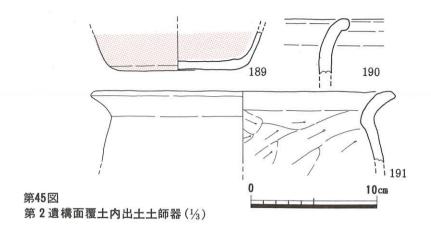




第44図 第2遺構面覆土内出土須恵器(2)(½, ½)

爪痕がみうけられる。高広編年のIVB期か。179・180は高坏である。179は脚部の二方向に箆による切り込みが貫通し、坏部内面には「≠」印の薄い箆記号がみられる。180の脚部も「釣り針」型の箆記号がみられる。181は高台を付す壺で、182はやや大きめの坩である。183は嘘で、体部上半に薄い沈線を一条入れる。第44図184~187は甕である。第43図188は甑で、底部の穿孔は4方向と思われる。

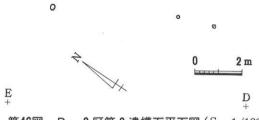
第45図は土師器で、内外 面ともに赤色塗彩を施した 坏や甕類がみられる。



○第3遺構面

(第46図)

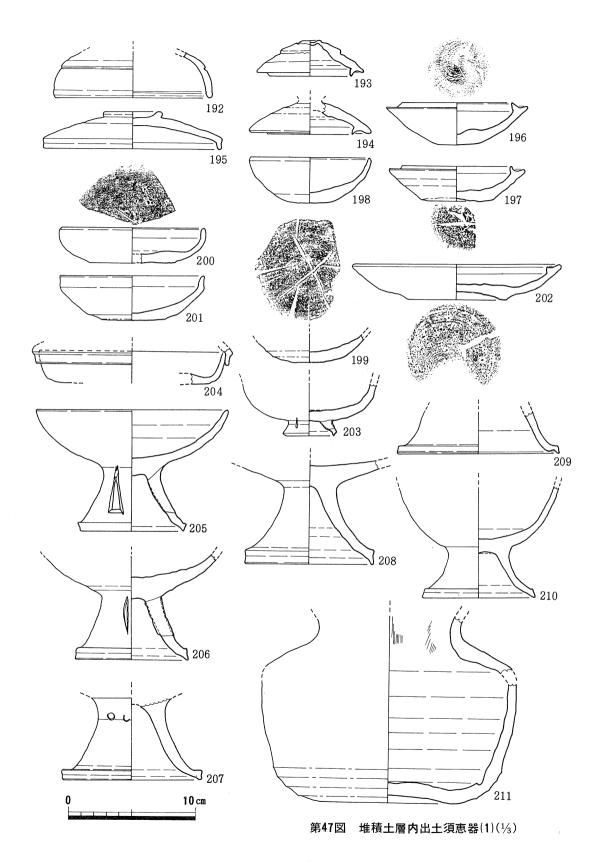
D-2区地山面で検出した。小ピット3穴以外の遺構はみあたらなかった。この地山面からは、土器片も3片しか出土していない。

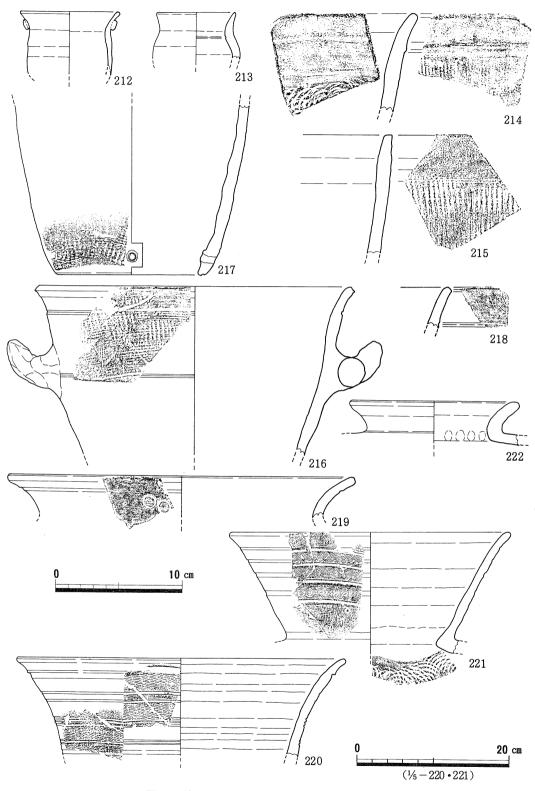


第46図 D-2区第3遺構面平面図(S=1/120)

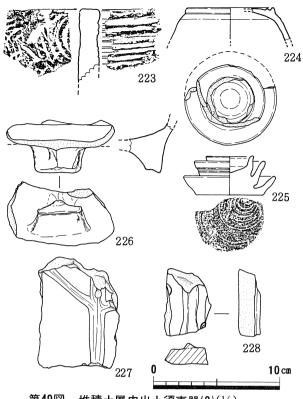
○表土および堆積土層からの出土遺物

須恵器(第47~49図)は、蓋・坏・高坏・鉢・壺・坩・甑・甕・横瓶と様々な器種が出土している。192~195は蓋である。192は山本編年のⅢ期。193・194はかえりの付いた小形の蓋で、194には宝珠状つまみが付いていたと思われる。195は、口縁が屈曲し輪状つまみを有している。196・197は高広編年のⅡ A期のもので、箆記号を付している。198も高広編年のⅡ A期。199・200は、底部内面に「×」印の箆記号がある。201は屈曲口縁の坏で、202は回転糸切り痕を残す。203は低脚付きの坏か。204は蓋と坏との重ね焼きの破片である。205~210は、高坏である。205は脚部に二方向の一段透しを、206は二方向の切り込みをもち、207には竹菅文が二つみられ、208は透しも切り込みもない。209の外面は、赤茶褐色を呈しており柿渋を塗り付けたものか。210も低脚の高坏か。211は平底の壺である。第48図212・213は坩で、212には頸部にボタン状の飾りが付き、213は内面に一条の沈線を巡らしている。214~217は甑で、217の底部内面に円孔を穿つ時の指押さえの痕がみられる。218~221は、甕である。218は薄い波状文と沈線がみられ、219には竹菅文が二つ残っている。220・221は大甕の口頸部で、櫛描波状文と沈線があられ、219には竹菅文が二の残っている。第49図223は塼の破片で、イガラビ1号墳出土の塼とは違うタイプのものである。224は硯の破片か。225は須恵質の灯明皿で、三段重ねで一体化しており、巧妙





第48図 堆積土層内出土須恵器(2)(1/3,1/5)



第49図 堆積土層内出土須恵器(3)(1/3)

に作られているので接合痕はわからない。底部に回転糸切り痕を残す。226は須恵質のもので形態不明。底部はゆるやかな丸みを持ち、内面にカキ目調整を施す。脚部は低く三角柱状になっている。生焼けのためか外面灰褐色、内面淡赤褐色を呈している。また、227・228の2片は、池ノ奥C遺跡発見以前に出土したものである。

第50図は土師器類である。229 は土師質土器片で、内外面にカキ 目がみられる。230は内外面とも に赤色塗彩を施した坏で、回転糸 切り痕を残す。231・232は壺・甕

類で、胴部外面は刷毛目調整を、内面は箆削りを、231は口頸部内面にも刷毛目調整を施 している。233は竈で、234・235は土製支脚である。

土馬(第51図)は、須恵質のものが4点出土している。236は胴部だけ残存している。 股間に粘土を貼り付け男根を表現しており、胴部に比して頭部はかなり大きいように思われる。焼成前に柿渋を塗った可能性があり、赤褐色に発色している。237は脚の一部、238・239は尾の部分である。

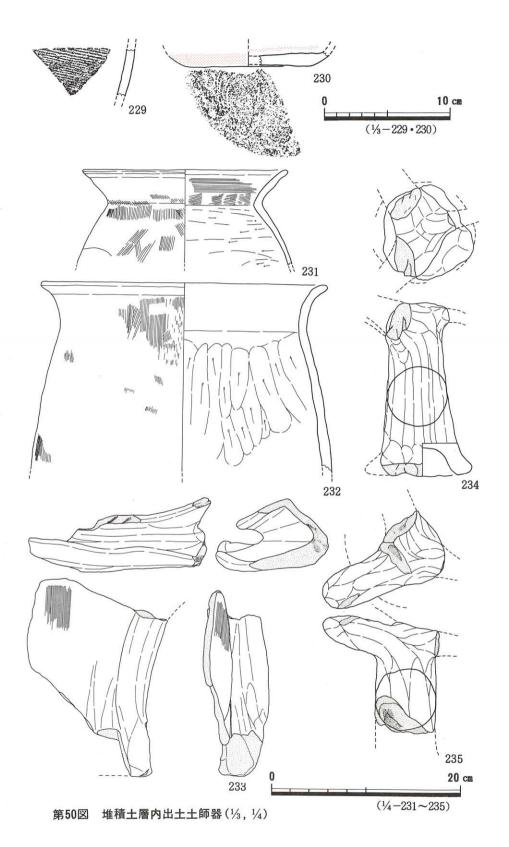
第52図240・241は中世の陶器片で、亀山焼系統のものであろう。

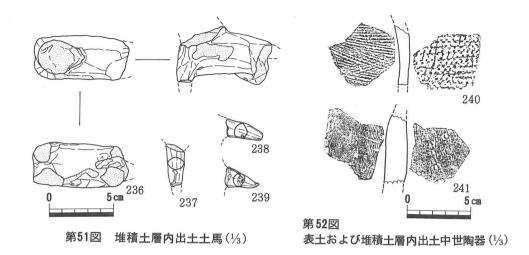
土錘も47点出土しており、1点だけ瓦質のもの(137頁第96図496)で、他はみな土師質である(136頁第95図430~449、137頁第96図450~475)。

註

註1 松江市教育委員会『薦沢A遺跡,薦沢B遺跡,別所遺跡』1988年

註2 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984年





$[F-1\sim G-2\boxtimes]$

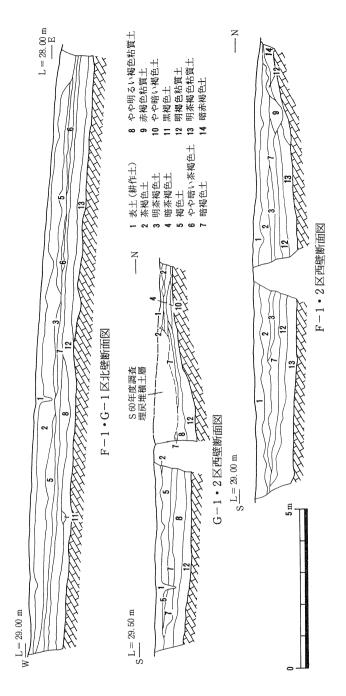
表土から最下層の地山までの間に14層を数える。深さは、谷間中央部の $1\cdot 2$ 区間畦畔のところで、 $1.0\sim 1.4$ mを測る。地山は、2区側では赤みを帯びているが、概ね明褐色を呈している。(第53図)

調査の結果,三つの遺構面を確認した。遺物は、小範囲にしか存していない3層、9層、10層、11層、14層以外の層全てから出土しているが、量的には東側のA~E区に比べるとかなり少ない。また、表土および7層暗褐色土までの堆積土層内に、池ノ奥1号墳の須恵器甕片16片、池ノ奥C遺跡の特殊土器片3片が紛れ込んでいた。

○第1遺構面

G区側では 8 層やや明るい褐色粘質土上面,F区側では12層明褐色粘質土上面にあたる遺構面である。円形土壙 1 基(SK-14),ピット50穴,炭土 2 所,性格不明遺構 1 所を検出した。ピットは, $A\sim E$ 区の各遺構面のピット群と同様に,形状,法量ともに大小様々でまとまりがなく,建物とすることはできなかった。(第54図)

SK-14:平面プランは楕円形を呈している。上端径50×38cm,下端径43×32cm,深さは8cmを測る。壁面には焼土はみあたらないが、南側床面に固く焼け締まった焼土が、堆積していた。土壙内の堆積土は暗褐色土だが、炭の量により、三つに分けることができた。第55図は、覆土内から出土したもので全て須恵器である。土師器は、図化できるものがなかった。242・243は坏である。242は半球状のもので、箆切り後外面は回転ナデを施している。243は低脚の付く坏。脚部だけ残存。244は壺で、肩部内面に指頭圧痕がみられる。245~248は、坩である。248は、頸部から肩部にかけて沈線が施されている。249は把手の部分。250は甕の口頸部。



第56図は遺構面上か ら出土したもので, 259は土師器の壺類で、 他は須恵器である。 251は蓋で、宝珠状つ まみを有し周囲に回転 糸切り痕を残している。 252は坏で, 底外面に 回転糸切り痕を残し, 体部はやや丸みを帯び ている。高広編年のⅣ A期か。253は小形壺 で,254~258は坩であ る。坩は平底をしてお り, 切り離しは箆切り である。256は肩部に ボタン状の飾りが三つ 貼り付けてある。

- **2 区土層断面図**(S = 1/120)

. ⊙ ?

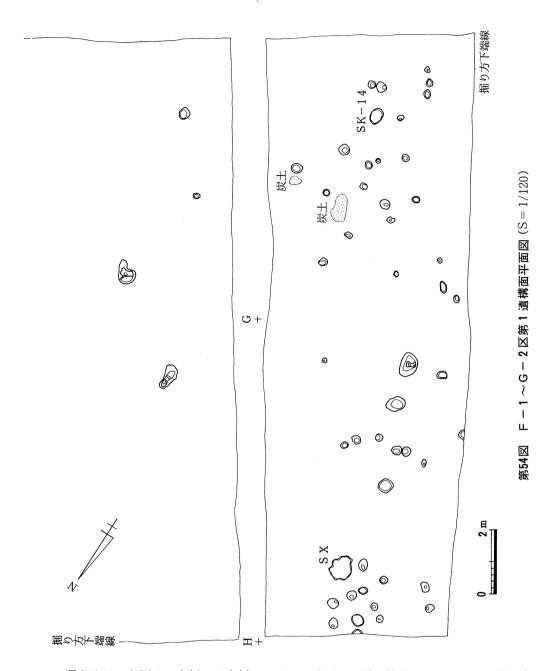
Щ

第53区

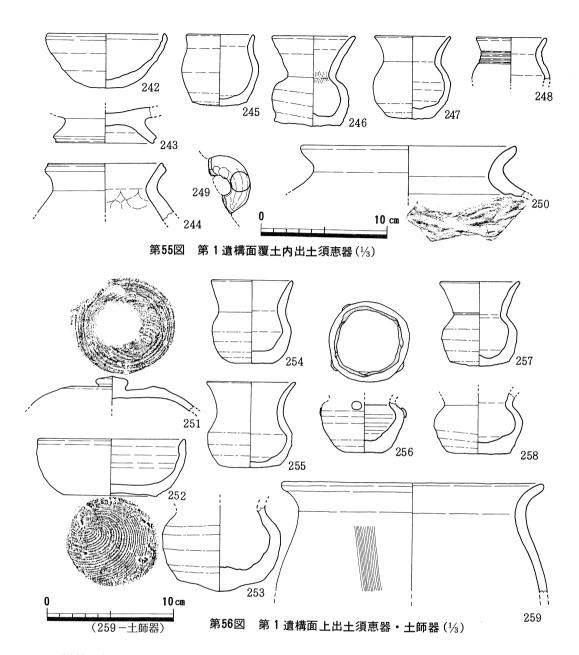
○第2遺構面

G区において,第1遺構面下約 $16\sim36$ cmのところにある12層明褐色粘質土上面で検出した遺構面である。円形焼土壙2基($SK-10\cdot11$),ピット18穴,焼土2所,炭土2所を確認した。ピット群から建物を組むことはできなかった。(第57図)

SK-10 (第58図): 平面プランは楕円形を呈している。上端径125×110cm, 下端径95×80

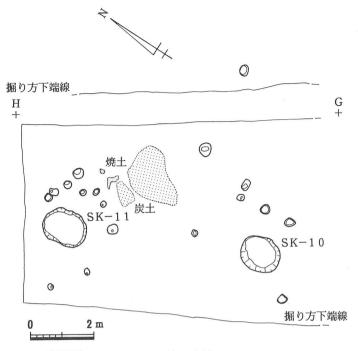


cm, 深さは32cmを測る。東側から南側にかけての壁面は,厚さ最大で25mmを測る硬質の青灰色焼土に,北西側の壁面では,やや硬質の襞の付いた茶褐色焼土となっていた。床面には焼土はなく,小ピットが3穴(15×13×20cm, 15×13×17cm, 10×8×6cm)あった。土壙内の堆積土は,上層炭の混じったやや暗い褐色土,中層炭の混じった褐色土,下層炭土,そして最下層褐色土の4層に分かれた。最下層上には,壁面から崩れ落ちたと思われ



る硬質の青灰色焼土,および,やや硬質の茶褐色焼土がみられた。土器片は混入していなかった。

SK-11 (第59図): 平面プランは楕円形を呈している。上端径139×105cm, 下端径120×90cm, 深さ25cmを測り, 本遺跡で一番大きな円形焼土壙である。壁面上部のところどころ, および, 床面の一部が硬質の青灰色焼土に, 床面の数か所が硬質の茶褐色焼土に覆われていた。土壙内の堆積土は3層に分かれ, 上層炭を含むやや暗い褐色土, 中層炭を含む褐色土, 下層炭土であった。土器片は入っていなかった。



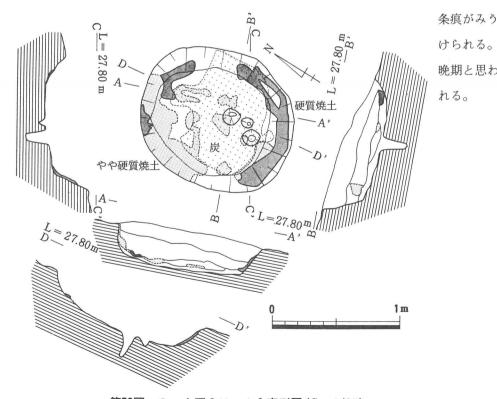
G-1·2区第2遺構面平面図(S=1/120)

第60図260~262は、覆土 内から出土した須恵器で, 260・261は小形の坏である。 261は,底部が平坦で「×」 印の箆記号がみられる。 262は小形壺か。263~265 は、遺構面上から出土した 坩で, 平底をしている。 263・264の切り離しは箆切 りである。

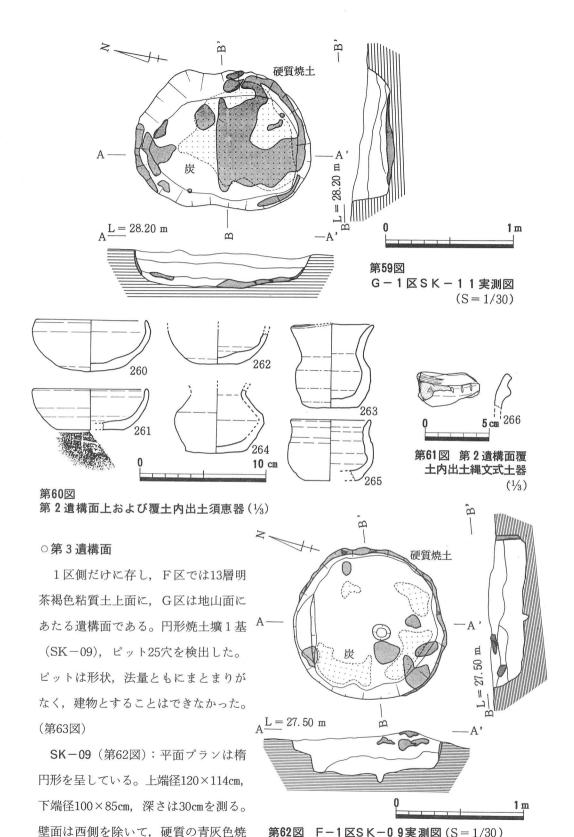
また,第61図266は覆土 内から出土した縄文式土器 片である。外面の突帯部に 刺突文があり, 二条の沈線 もみられ, 内面にも二条の

> けられる。 晩期と思わ

れる。



第58図 $G-1 \boxtimes S K-1 0 実測図 (S=1/30)$



第62図 F-1区SK-09実測図(S=1/30)

土がよく残っており、厚さは最大50mmを測る。 年+

床面には焼土はなく、小ピット(上端直径12 cm,深さ7cm)があった。土壙内の堆積土は、 上層青灰色焼土・礫を含む褐色土、中層青灰 色焼土・炭少量ほど含む褐色土、下層炭土の 3層に分かれる。3層とも須恵器、土師器が 入っており、須恵器長頸壺(第64図272)、土 師器壺(第65図274)の一部であった。

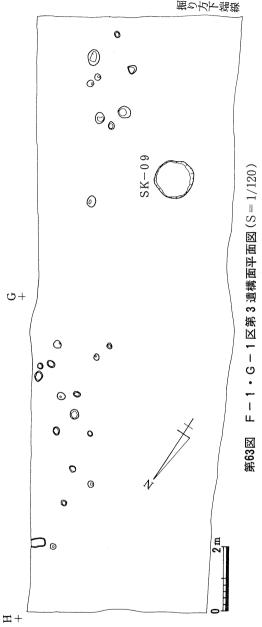
第64図は,覆土内および遺構面上から出土した須恵器である。267は覆土内から出土した坏で,低脚が付く。268は遺構面上にあった蓋で,天井部と口縁部の境に上下の削りによって突帯を表している。天井部の箆削りは右回りである。山本編年の『期の新しい段階か。269~271は,遺構面上から出土した坩である。269は丸底気味で,頸部と肩部の境に薄い沈線が施してあり,底部は箆切り後未調整のままで粘土が盛り上がっている。270・271も切り離しは箆切りである。

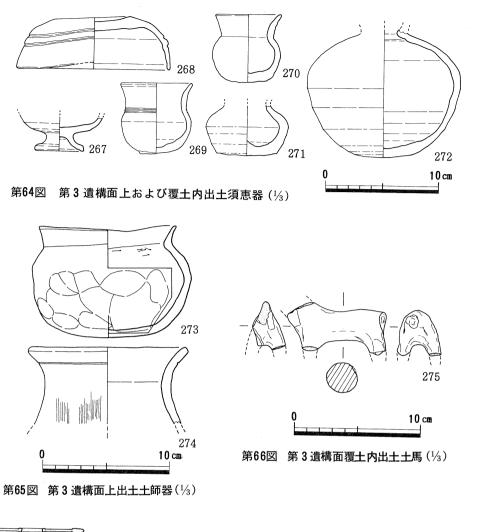
第65図273は、遺構面上にあった土師器短 頸壺でほぼ完形。体部外面には指押さえの痕 がみられる。

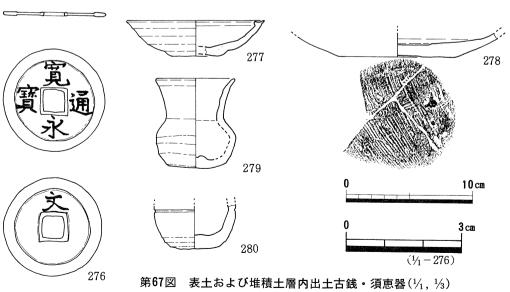
他に覆土内から出土したものには、第66図 275の須恵質の土馬と、土師質の土錘が1点 (137頁第96図479) ある。土馬は、胴部だけで性別は不明。本遺跡出土の土馬としては、一番小さな胴部である。

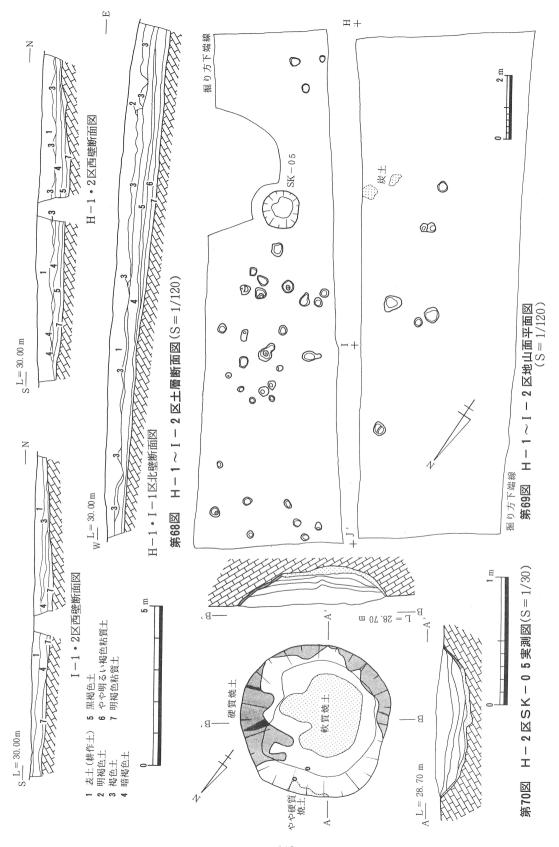
○表土および堆積土層からの出土遺物

第67図は、表土および堆積土層から出土した遺物である。276は表土内から出土した寛永通宝(江戸時代前期)であり、遺存状態良好。277~280は須恵器である。277は高広編年の『A期の坏か。外面は箆削り後回転ナデ調整を施す。278は静止糸切り痕を残してい









る。坏かあるいは鉢か。279・280は坩である。279は箆切りによる切り離し後ナデ調整を施しているが、280は未調整。

土錘も3点土師質のもの(137頁第96図476~478)が出土している。

[H-1~I-2区]

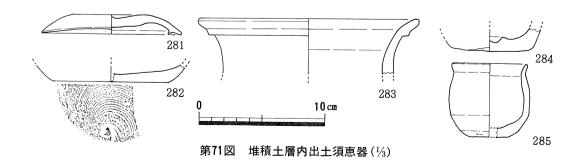
本遺跡の西端に位置する調査区である。

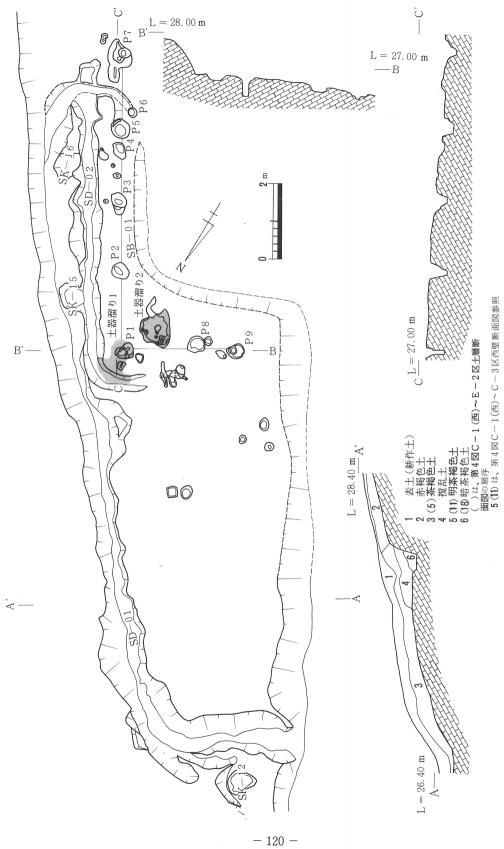
表土から最下層の地山までの間に、7層を数える。深さは谷間中央部の $1\cdot 2$ 区間畦畔のところで、 $0.55\sim 1.2$ mを測り地山面に達する。地山は明褐色を呈しており、粘性が強い。(第68図)

調査の結果、地山面で円形焼土壙 1 基(SK-05)、ピット40穴、炭土 2 所を検出した。ピットの形状、法量は大小様々でやはりまとまりがなく、建物を組あげることができなかった。(第69図)

遺物は遺構面である地山面からの出土がなく、堆積土層の2層以外から出土しているが、量的にはかなり少ない。また、池ノ奥1号墳の須恵器甕片が3片、池ノ奥C遺跡の特殊土器片も2片落ち込んでいた。

SK-05 (第70図): 平面プランはほぼ円形をしている。上端径125×120cm, 下端径100×80cm, 深さは30cmを測り, かなり大きな円形焼土壙である。壁面上部が, 一部を除き非常によく焼け締まっており, その厚さは20~30cmを測る。床面は軟らかい焼土で覆われていた。土壙内の堆積土は大まかに4層に分かれ, 上層炭化物粒子・小礫を含む暗褐色粘質土, 中層炭化物粒子を多量に含む暗褐色粘質土, 下層炭を多量に含む黒褐色粘質土, 最下層直径30cm以下の炭を多量に含む炭化物層であった。土器片はなかった。





C-3・D-3区地山面実測図 (S=1/100) 第72図

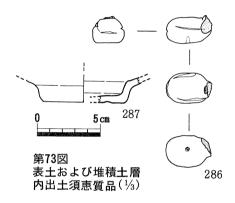
「C-3 · D-3区7

C-2, D-2区北側の一段高いところの緩斜面に、調査の中途で新たに設けた拡張区である。(第72図)

1層表土下10~40cmで、南側は3(5;77~78頁第4図C-1(西)~E-2区土層断面図の層序、以下同じ)層茶褐色土に、北側ではC-3区からD-3区東北方にかけては明褐色の地山に、D-3区北西方では厚み8~30cmの2層赤褐色土を挟んで、明褐色の地山に達した。1層および2層内からは、磨滅した須恵器・土師器片が少量出土した。3(5)層の厚みは、C-2区へつづくC-3区南端で最大50cmを測り、須恵器・土師器片、土師質の土錘(137頁第96図480)が出土している。4層は攪乱土で、厚さは12~30cmを測り、D-3区中央部の3(5)層下に存していた。5(11)層は明茶褐色土で、厚さは30~34cmを測り、C-3区西側の表土下に存しており、須恵器片が少量出土した。

第73図286は表土内から出土した須恵質の土製品だが、一部欠けており形状不明。287は2層から出土した須恵質の灯明皿で、底外面に糸切り痕を残す。

北側で検出された明褐色の地山は,3(5)層,5(11)層の北端付近で急激に落ち込み,6(18)層暗茶褐色土を伴った溝状遺構(SD-01)を形成し,3(5)層下を南へ緩やかに傾斜し,C

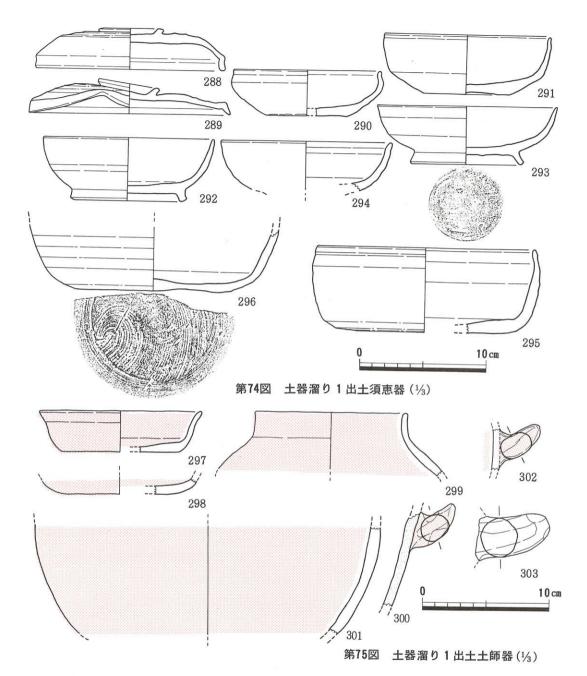


-3区、C-2区との境付近で $40\sim50$ cmの壁面を作り下っている。SD-01は、東西方向に伸び D-3区西端で南に回り込み途切れていた。SD-01上の6 (18)層からは、赤色塗彩を施した土師器がよく出土している。

C-3区の地山面で、北東側に淡黄色、淡緑色を呈した粘土塊の入っていた円形土壙(SK-15・16)が付いている溝状遺構(SD-02)、須恵器および赤色塗彩を施した土師器を中心にして成り立っている土器溜り1、赤色塗彩を施した土師器が大部分を占める土器溜り2を伴った、掘立柱建物址(SB-01)を検出した。このSB-01は、南側の大半を後世の開墾で削平され失われているが、東西方向に4間、南北方向に1間の柱穴が「L」字型に残存していた。

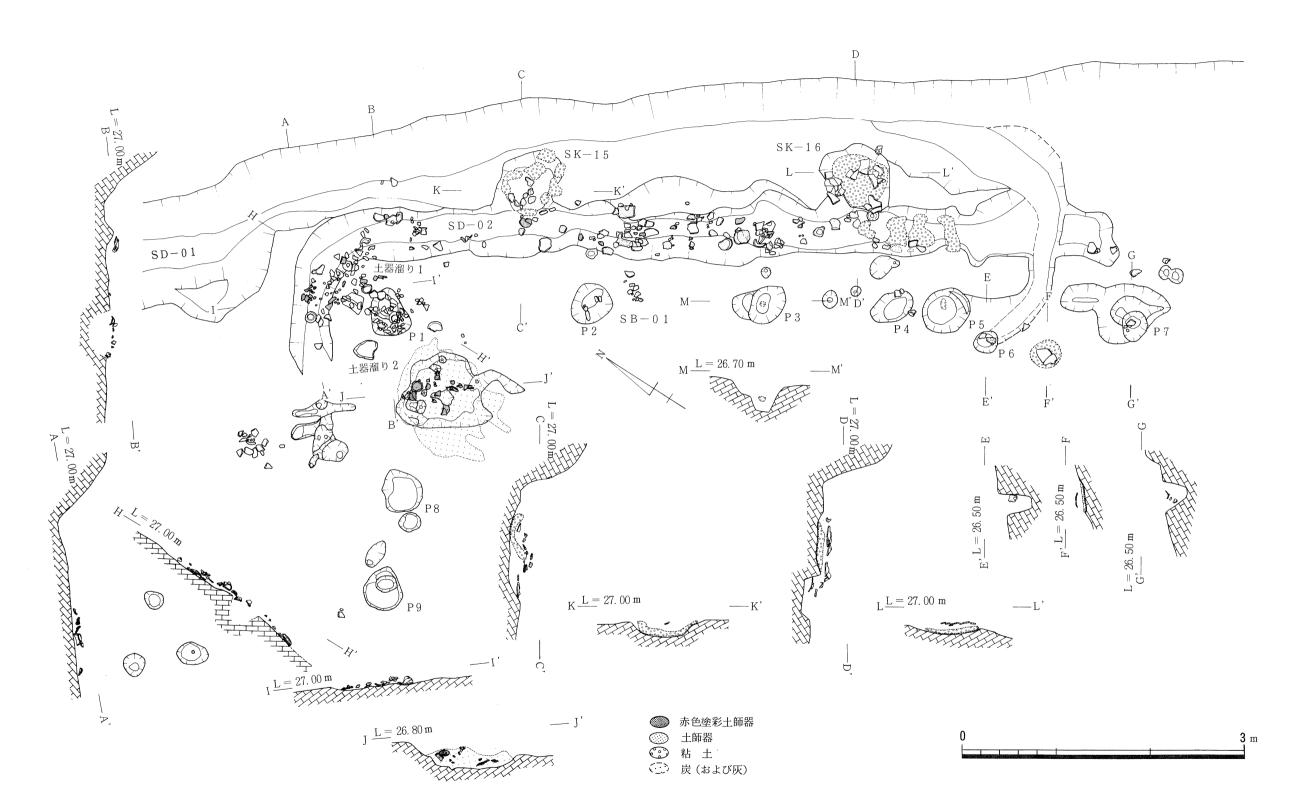
D-3区の地山面では、南に回り込んで途切れているSD-01の西外側に、円形土壙(SK-12)を確認した。

SB-01 (第73・76図): 主軸方向はN35°Wで、南側は後世の開墾で削平され失われて



いるが、東西方向に桁行4間、南北方向に梁行1間が「L」字型に残存している。柱間寸法は、桁行7.9m(西方P1から2.1+1.9+1.9+2.0m)、梁行3.0mを測る。柱穴の掘り方はほぼ円形あるいは楕円形で、P9は2段掘りで、径18cmの円孔がある。各柱穴の法量は、P1-東西径30×南北径56×深さ50cm、P2-42×44×44cm、P3-56×40×32cm、P5-52×48×32cm、P7-57×44×31cm、P9-42×48×20cmを測る。

P1上、および、そこから北側SD-02の北隅角にかけての地山面に、須恵器、赤色塗彩



第76図 C-3区SB-01, SD-02, SK-15·16実測図(S=1/40)

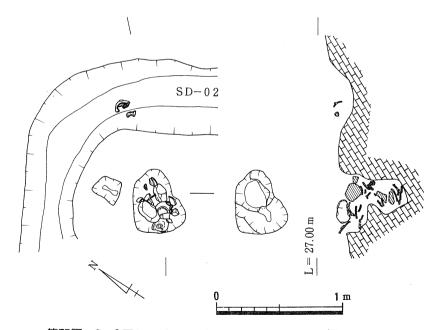
を施した土師器等から成り立っている土器溜り1が存していた。

土器溜り1からの須恵器としては、蓋・坏・高坏・鉢が出土している。第74図288・289は蓋である。輪状つまみを有し、口縁部はやや外方に開いているが短く直立するもの。289は器高が低い。高広編年の■B~ⅣA期。290・291は無高台の坏で、底外面に回転糸切り痕を残す。290は、体部がやや丸みを帯び口縁端部が内傾している。292・293は高台付きの坏で、293の底外面には静止糸切り痕がみられる。294は高坏の坏部、295・296は鉢である。296の底外面には、回転糸切り痕が残っている。

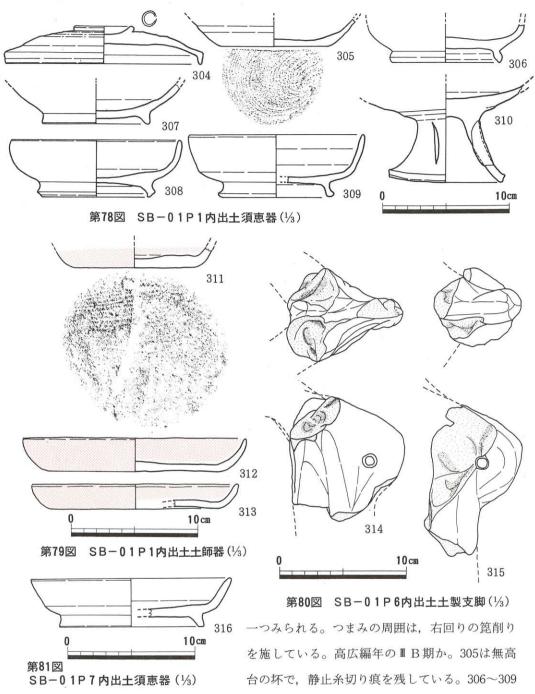
赤色塗彩を施した土師器(第75図)では、坏・把手等が出土している。303以外は全て、 赤色塗彩が施されている。297・298は坏で、内外面ともに赤色塗彩。299は壺で、頸部は 短く直立し、内外面ともに赤色塗彩。300・301は、接合できないが同一個体。把手付きの 鍋か。把手は、先端が上方に反り返り断面は扁平。内外面ともに赤色塗彩。302も小形の 把手で、先端はやや上方を向き断面は扁平。内外面ともに赤色塗彩。300・301と同一個体 の可能性がある。303は普通の把手である。

土師質土錘(137頁第96図481)も、一つ含まれている。

また、この土器溜り1直下のP1内にも、底まで須恵器、赤色塗彩を施した土師器が、 多量に詰まっていた(第77図)。須恵器(第78図)は、蓋・坏・高坏が出土している。304 は蓋で、輪状つまみを有し口縁部が短く直立するもの。天井部外面に、径1cmの竹菅文が

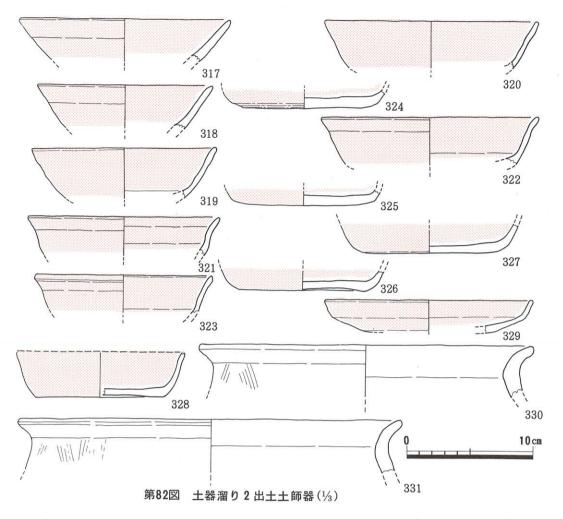


第77図 C-3区SB-01P1内遺物出土状況実測図(S=1/30)



は高台付坏で、308・309の底外面には静止糸切り痕が残っている。高広編年の \mathbf{II} B $\sim \mathbf{IV}$ A 期か。310は高坏で、脚部に二方向の切り込みがある。内外面ともに赤色塗彩を施した土師器は、坏と皿が出土している。第79図311は坏で、静止糸切り痕がみられる。312・313は皿で、312の底外面にはロクロ回転による箆切りの同心円の痕がみられる。

P6内からは土師質の土製支脚(第80図314・315)、P7内からは須恵器の高台付きの皿



(第81図316) が出土している。さらにP3とP5内には、 $SK-15 \cdot 16$ 内にあるのと同様な粘土塊が入っていた。

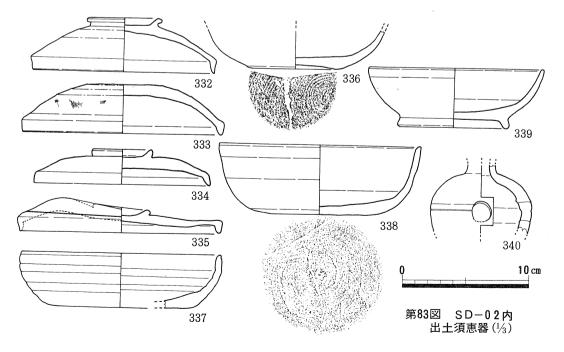
残存しているところはわずかしかないが、建物址内およびその近辺に焼土は認められなかった。しかし、P1とP8との間で検出した不整形土壙内に、内外面ともに赤色塗彩を施した土師器を多量に含む炭・灰土層を確認した(土器溜り2)。この不整形な土壙は、上縁で長径139cm、短径80cm、深さ11cmを測り、形状がまちまちな小ピットを6穴伴っている。炭・灰土層は、土壙全体をほぼ覆っており厚みは最大23cmもあり、一部は土壙の外まで広がっている。この土器溜り2内から出土した赤色塗彩を施した土師器の器種は、坏がほとんどで高坏もみられた。

第82図317~328は坏で、内外面ともに赤色塗彩を施している。324の底部の切り離しは 箆切りで、何かが当たった線痕を多方向に残している。底部と体部の境目に箆削りを施し ている。325は底外面に回転糸切り痕を残している。327も底外面に糸切り痕を残している。 329は高坏の坏部と思われ、内外面ともに赤色塗彩を施す。318の体部外面、325・328の底部外面、319の内外面には、二次焼成を受けた痕の黒斑がみりけられる。330・331は、普通の甕類の口頸部である。

SD-02(第73・76図):SB-01北東側で検出された。上端幅は最大で86cm,下端幅16~51cm,深さ13~20cmを測る。掘り方は「U」字状を呈している。SB-01を取り囲むように巡っているが,西側では地山面が緩やかに傾斜しているなかに消えている。東側の方では,「T」字状になっており,「一」部分北側の方は地山の壁面にぶつかり,そこで途切れている。また,南側に曲がった溝は,SB-01の柱穴であるP5とP7との間をとおり,P6の方へ向かっていると思われるが,後世の開墾による削平のためにはっきりしない。この溝内からは,多量の須恵器,赤色塗彩を含む土師器および粘土塊が出土している。このSD-02は,SB-01を巡るように掘られていることから推察して,SB-01内に雨水が入らないようにした排水溝と思われる。

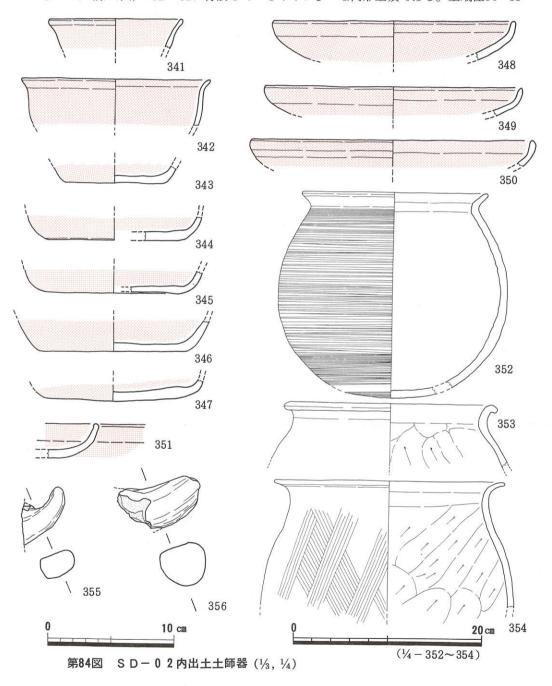
第83図は須恵器である。332~335は蓋で、輪状つまみを有し口縁部が短く直立するものである。333はつまみが剝離しており、つまみを付す前についた箆状工具による線痕をみることができる。高広編年の \blacksquare B~ \blacksquare A期。336~339は坏で、339は高台の付くもの。336は静止糸切り痕を、337は糸切り痕を残し、338の切り離しは箆切りである。高広編年の \blacksquare B~ \blacksquare A期か。340は腺である。

第84図は土師器である。341~351は、内外面ともに赤色塗彩を施したものである。341



~347は坏,348~351は皿類である。ほとんどのものは磨滅が著しく、調整、切り離し等不明である。342・347は同一個体の可能性がある。352~354は壺・甕類で、352の外面は櫛状工具によるカキ目調整か。354には外面に刷毛目調整がみられる。355・356は把手の部分であり、355は先端が上方に反り返り扁平な断面をしている。

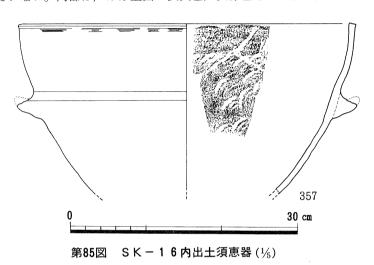
SK-15 (第76図): SD-02に付設しているややいびつな円形土壙である。上端径64×85



cm, 下端径 42×55 cm, 深さ19cmを測り, SD-02とは底部が連なっている。淡黄色, 淡緑色をした粘土塊が, 底部の方に詰まっており, その上には須恵器, 土師器片が散らばっていた。

SK-16 (第76図): SK-15 と同様に、SD-02 に付設しているややいびつな楕円形土壙である。上端径 60×85 cm、深さは中心部で7 cmを測り、壁面はなだらかに傾斜している。SD-02 とは底部がつながっていない。内部は、ほぼ全面に淡黄色、淡緑色をした粘土塊が敷

き詰められており、その 上には、須恵器の大きな 把手付きの鍋(第85図 357)と思われる土器片 が散在していた。口縁部 に僅かな櫛状工具による ナデがみられ、端部は平 坦である。焼成はかなり 不良で、外面は黒褐色か ら黄褐色を帯び、内面は

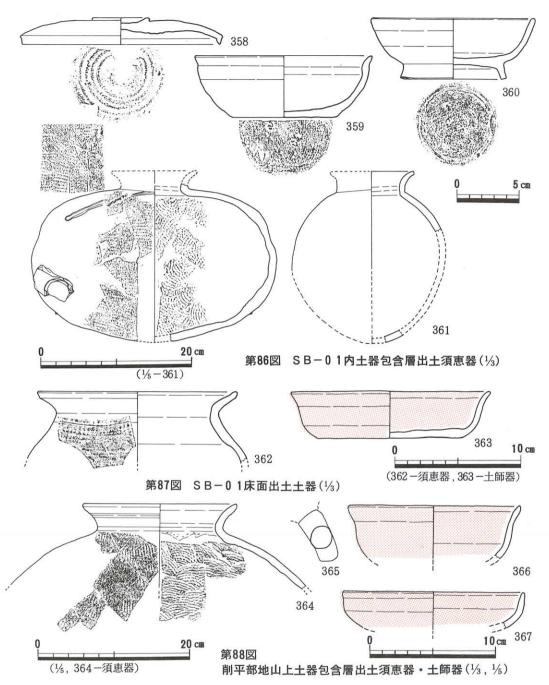


赤褐色または淡黄灰色を呈している。

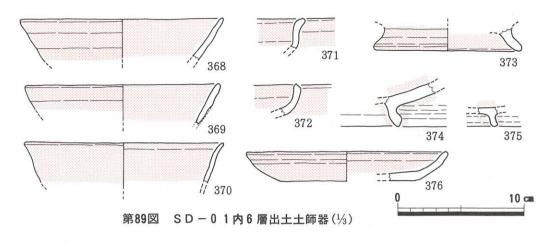
第86図は、SB-01内の土器包含層から出土した須恵器である。358は蓋で、輪状つまみを有し口縁部が短く直立するもの。天井部内面には、沈線状の左回りのカキ目がみられる。高広編年のⅣA期か。359・360は坏で、359は無高台のもので、静止糸切り痕を残し、口縁がやや直立し外傾している。360は高台付きで、静止糸切り後ナデを施している。高広編年の■B期か。361は横瓶で、肩部に「×」印の箆記号があり、自然釉付着のためか体部外面の叩き目は不明瞭。焼き台が付いている。また、土師質(137頁第96図484)も出土している。

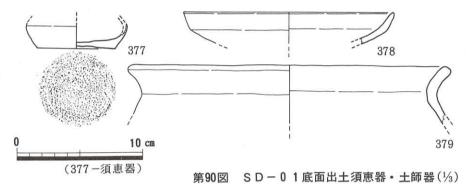
第87図は、SB-01床面出土の土器である。362は須恵器の壺で、肩部に平行叩き目痕が みられる。363は内外面ともに赤色塗彩を施した土師器の坏で、回転糸切り痕を残してい る。また、土師質の土錘(137頁第96図485)も1点出土している。

第88図は、SB-01残存部南側の後世行われた削平により、落ち込んでいる地山面上の 土器包含層から出土した土器である。364は須恵器の大甕である。365は土師質のもので、 土馬の脚あるいは尾のようにもみえる。366・367は、内外面ともに赤色塗彩を施した土師 器の坏である。また、土師質の土錘(137頁第96図486)もみられた。

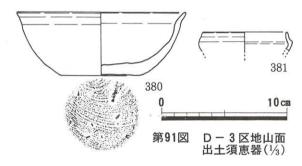


SD-01(第73図):地山はSD-02北側で,高低差 $78\sim61$ cmの壁面を形成し一段高いテラスに連なっており,このテラスは西の方へ伸びている。SD-01は,このテラス西方の壁面直下に存している。上端幅 $141\sim51$ cm,下端幅 $58\sim8$ cm,深さは南側の上端から測り $24\sim8$ cmである。掘り方は,ほぼ「U」字状を呈している。東方では,SD-02につながっている。





このSD-01内の堆積土でもある 6(18)層暗茶褐色土内からは、赤色 塗彩を施した土師器片がよく出土し ている。器種は坏が多く、皿類もみ られる。第89図368~375は坏で、368 ~372は口縁部片、373~375は高台



の部分である。376は皿である。他に土錘も土師質のものが 2 点(137頁第96図482・483) 出土している。

また, SD-01底面からは須恵器の小形壺 (第90図377) と思われるものと, 土師器の坏類 (378), 甕類 (379) も出土している。

ところで、SD-02東端部の「T」字状の「-」部分の溝については、SD-01のつづき とみなした方が妥当と推察される。

第91図は、D-3区側の地山面から出土した須恵器である。380は坏で、静止糸切り痕を 残している。381は小形の壺型土器と思われる。

[E-3区, G-3区, および, その他の出土遺物]

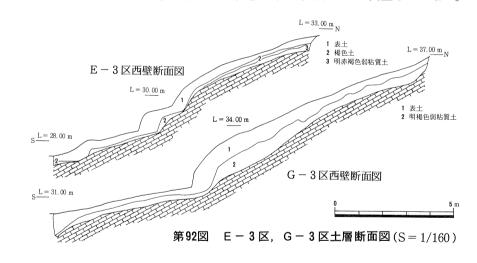
E-3区は,E-2区北側の斜面に調査の中途で新たに設けた幅 3 m,長さ11 mのトレンチで,南北の標高差は 5 mを測る。この斜面の竹林の中で,池ノ奥C遺跡を発見する手掛かりとなった,突帯および竹菅文を施した特殊土器片を表採したことに基づいて設定したものである。

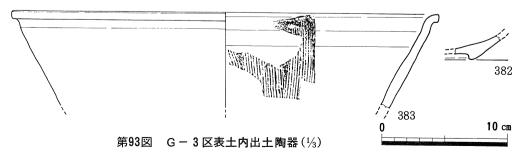
表土下 $0.35\sim1.0$ mで赤褐色の地山に達し、その間は三つの層に分かれた。遺構はみあたらなかった。(第92図)

遺物は、1層、2層から磨滅した須恵器片が極少量出土した。しかし、池ノ奥C遺跡の特殊土器片は出土しなかった。

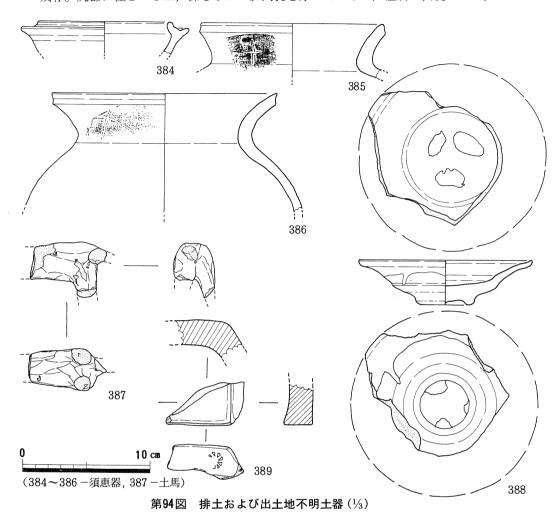
G-3区は、G-2区北側の石垣により一段高くなったテラス、および、そのつづきの斜面にやはり調査中途で新たに設けた幅 3 m、長さ15 mのトレンチで、南北の標高差は6.7 mを測る。

表土下0.4~1.6mで赤褐色の地山に達したが、遺構は確認できなかった。(第92図) 遺物は、1層から少量の須恵器片、および、高台を削り出した陶器片(第93図382)、近 世以降の擂鉢型陶器片(383)、2層からの須恵器片3片ぐらいしか出土していない。





第94図は、排土内および出土地の不明な遺物である。387は須恵質の土馬で、胴部下半 残存。尻部に径2×3 mm、深さ5 mmの肛門孔を穿いているが、性別の表現はない。



4. 出土遺物の検討

[土錘について]

本遺跡から出土した土錘の総点数は107点にのぼる(第95・96図)。胎土で分けてみると、 瓦質のものが1点,須恵質2点,残りの104点が土師質のものである。出土層位をみてみ ると,遺構面上およびその覆土内からは,土師質のものが10点しか出土していなく,排土 および出土地不明の7点(土師質)を除いた残り全ての土錘は,表土ならびに上層の堆積 土層内からである。

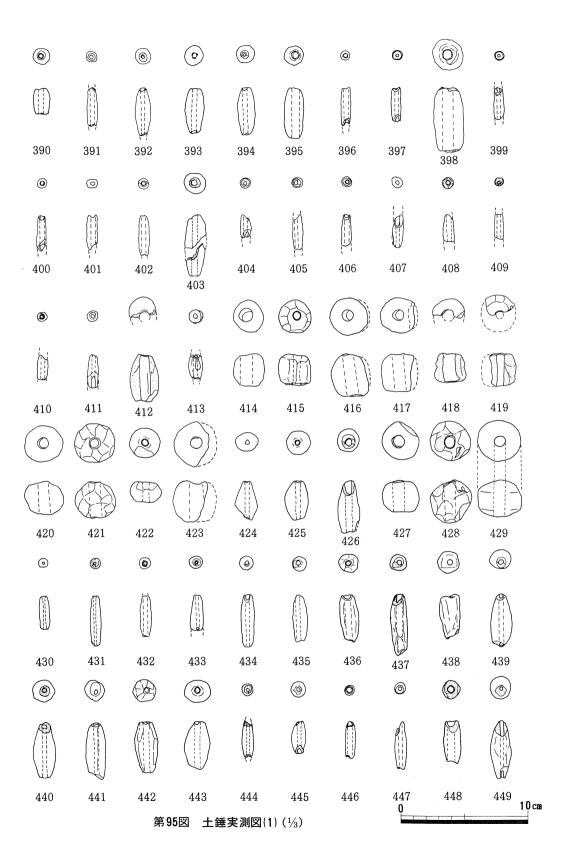
土錘の形態から便宜的に管状土錘、円筒形土錘、球形土錘、紡錘形土錘の4種類に分類

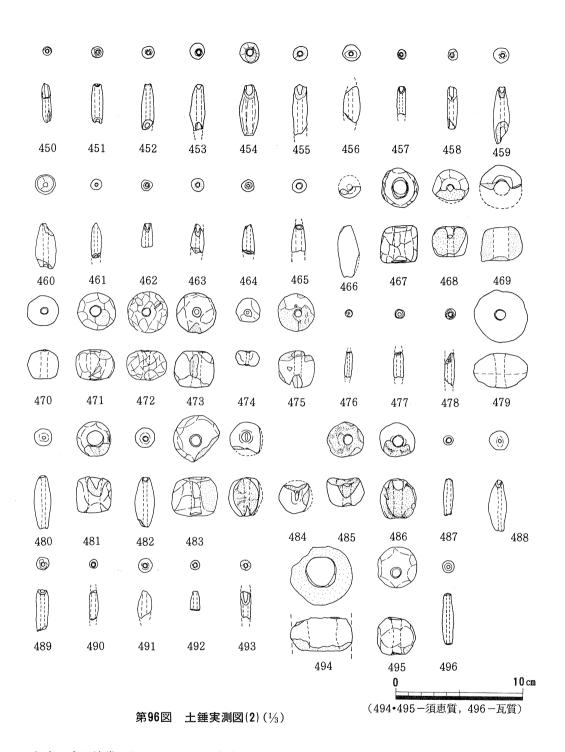
してみた。各々の出土数は、管状土錘75点(内瓦質1点)、円筒形土錘11点(内須恵質1点)、球形土錘17点(内須恵質1点)、紡錘形土錘4点で、圧倒的に管状土錘が多い。

管状土錘としたものは、細長い管のような形で長軸に沿って円孔が貫通している土錘のことである。平均的なものの長さは2~5 cm、径0.5~2 cmで、重量は1.3~12.4gを測る。398はやや大形で、412・443のように長さに比して径が大きく太いものも含まれる。成形は棒状のものに粘土を巻き付けていると思われ、指頭による押圧痕の残るものが多い。440には、ナデ調整がみられる。円筒形土錘としたものは、管状ののものより径が大きく長さと径にあまり差のない円柱状の土錘である。長さは2.3~3.3 cm、径は2.4~3.0 cmで、重量は11.8~26.4gを測る。成形は棒状のものに巻き付けていると思われるが、467は形を整えた後一方からの穿孔、468は二方から穿孔したものか。494は須恵質のもので、長さは不明だが径は4.85 cmと大きく、本遺跡では異質な土錘である。球形土錘としたものは、球形に近い外観を呈している土錘である。大きさは2.5~3.2 cm前後で、重量は11~30g程である。成形は棒状のものに粘土を巻き付けているのと、形を整えてから二方(421・423・472?)、あるいは一方(484・495)より穿孔しているものがある。484は穿孔時の指圧によるのか片側が扁平になっている。また、475にはナデ調整を施している。紡錘形土錘としたものは、円柱状で両端の尖った土錘である。479は長さ2.7 cm、径4.2 cmで、重量は46.8gあり、形を整えてから二方向穿孔したものと思われる。本遺跡出土中最も重い土錘である。

以上のように本遺跡出土の土錘について形態から分類を行ってみたが、それではこの土錘の用途は何かを考えてみたい。歴史時代における土錘の用途としては、漁網錘、あるいは、祭祀関係遺物いわゆる玉類という二つの考え方がある。漁網錘の場合、現在の漁網錘と同様水中に垣根のように立つ漁網の下端に垂下したものと推定され、上端には浮子が付いていたものと思われる。また、現在漁網に盛んに使用されているのは管状土錘で、その他の形態の土錘を使用している例はあまりないようである。今使用されている例をみてみると、網の下端に土錘を付けた紐を下げているようである。重量も小型の刺網の2gのものから大きいのは1㎏を超えるものまでと幅がある。玉類とは、古墳時代祭祀の伝統を伝える土製模造品の一つである。

ところで、出雲国風土記に「朝酌促戸渡。…則ち至を東西に亙す。…大き小き雑の魚にて、浜課がしく、家闖ひ、市人四方より集ひ、自然に鄽を成せり。[玆より東に入り、大井浜に至るまでの間の南北二つの浜は、並びに白魚を捕り、水深し。]」という記載がみられる。 [] の記述は、福富の浜と岩汐谷の出口にあたる浜についてのことで、白魚の漁場があったようである。この二つの浜は近世末以来埋め立てられて、今では大井新田とい





う広い水田地帯になっているが、当時はこの浜辺まで、イガラビ遺跡から直線距離にして、約1kmぐらいと推察される。今でもある「矢田の渡し」付近では、筌という竹を編み川に仕掛けて魚を捕っていたようである。しかし、この二つの浜は、水深があるようなので刺

網を仕掛けて漁をしていたのだろうか。また、同風土記には「大井浜。則ち海鼠・海松あり。又、陶器を造れり。」と記載されているが、この大井浜は、本遺跡の東側谷が開けたところを流れる大谷川の河口付近である。この浜は岩汐谷の浜より東側にあたり、やはりナマコやミルという緑色藻類等の水産物を捕っていたようである。以上のような出雲国風土記の記載内容からも推定して、管状土錘については、漁網錘と考えて差し支えないと思われる。

これに対して、球形土錘は玉類すなわち祭祀関係遺物と考えたほうがよいと思われる。それというのも、池ノ奥A遺跡からも土錘が35点出土しているが、3点ほどが円筒形土錘であとの32点は全て球形土錘であり、管状土錘は1点も出土していない。しかも、この池ノ奥A遺跡の立地条件を考えると漁網錘とは考えにくい。池ノ奥A遺跡は、標高 $32\sim45\,\mathrm{m}$ のところにあり、浜辺に出ようとすると東隣にある池ノ奥窯跡群 (池ノ奥A遺跡とほぼ同じ時期にも操業をしていたようである)を横切らなくてはならなく、漁網を持っての歩行は難しいとみうけられる。またこの遺跡は、その他の出土遺物から推定してみると祭祀に関係した遺跡の可能性が強く、さらに、土錘も管状のものが1点も出土していなく、土錘のこの形態的な差が遺跡の在り方を示しているようにも思われる。

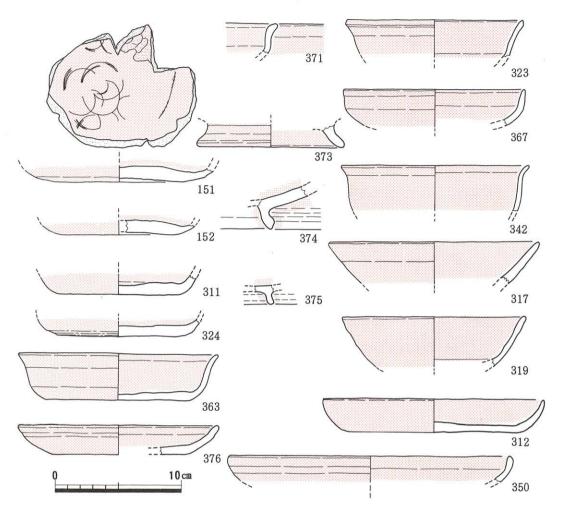
また、円筒形および紡錘形土錘については、円筒形土錘の一部は管状土錘の大形品と推察されるが、やはり大部分は玉類すなわち祭祀関係遺物であると考えられる。

註

- 註1 鳥羽市教育委員会『鳥羽贄遺跡』1975年
- 註2 金子裕之編『律令期祭祀遺物集成』1988年
- 註3 加藤義成『出雲国風土記参究』(松江今井書店) なお, [] は細川家本「出雲国風土記」原文の割注。
- 註4 註3に同じ。
- 註5 本報告書第2分冊「池ノ奥A遺跡」参照。
- 註6 本報告書第2分冊「池ノ奥窯跡群」参照。

[赤色塗彩土師器について]

本遺跡では、多量の内外面ともに赤色塗彩を施した土師器が出土している。特に、C-3・D-3区において検出された土器溜り1およびその下のSB-01の柱穴であるP1内、土器溜り2、SD-02内、さらにSD-01内からよく出土している。正確な個体数ははっきりしないが、破片を数えると約1600片にもおよぶ。しかしそのうち、接合、復元を行い、図



第97図 赤色塗彩土師器実測図(1/3)

化できたのは57点に過ぎない。

器種は、大半が坏・皿類(第97図)に大別でき、高坏・壺・鍋も少しみうけられる。

坏類の口径は13~15cm前後のものが多いが、最小で10cm、最大で17cmを測る。無高台のもの(151・152・311・324・363)と、高台の付くもの(373・374・375)に分かれる。口縁部の形態は、内弯するもの(367)、外反するもの(342)もみられるが、やや外反するもの(363)や、体部から口縁部にかけて外傾するもの(317・319)がほとんどである。また口縁端部を観察すると、丸みを帯びるものが大半を占めるが、外面に平坦面を形成するもの(323)、内面にやや平坦面を形成するもの(371)もみうけられる。

皿類は、口径15.5~22cm前後、器高は2~3.5cm前後のもので、体部から口縁部にかけて外傾するもの(376)と、内弯するもの($312 \cdot 350$)に分かれる。

暗文を施しているのは、図化できたものでは151の坏しか確認することはできなかった。 底部内面に円弧文を施している。

調整についてみてみると、確認できたものは全て、口縁部から体部にかけて、内外面ともにロクロナデの手法を用いている。また、324は外面の体部と底部の境目に箆削り調整を施している。底部の切り離しは、箆切り後ナデ調整を施しているもの(151・152)、箆切りのまま未調整のもの(324)、ロクロ回転による箆切り(312)、静止糸切り痕を残すもの(311)、回転糸切り痕を残すもの(363)に分かれる。

坏・皿類について、出雲国庁跡で分類されたものと比較してみると、暗文だけを施した土師器の第1型式とされるものは、1点もみあたらない。赤色塗彩を施し暗文を入れる第2型式については、1点(151)あり、他にも小破片だが極少量みられる。赤色塗彩を施し暗文を欠く第3型式に、大半のものが該当する。しかし、出土数に比して図化できたものの量は少なく、大多数の破片については磨滅が著しく判別できないものが多い。そのうえ、図化はできても、やはり磨滅が著しく調整等の観察不可能なものがかなりあった。時期については、出雲国庁跡出土例からみて概ね8世紀後半頃から末にかけての奈良時代から平安時代初頭に属するものと推定される。

坏・皿類の他に、高坏の坏部と思われるもの(127頁第82図329)、壺(89頁第21図65・122頁第75図299)も出土している。65は長頸壺の頸部で、調整はロクロナデを用い、体部との接合目に凹みがあり内面に指押さえの痕がみられる。299は短頸壺で、やはり調整はロクロナデを用いている。さらに、把手付きの鍋(122頁第75図300・301、同一個体)があるが、極めて稀有なものであろう。

歴史時代の赤色塗彩を施した土師器は、周辺の池ノ奥A遺跡(破片数約50点、無高台の 坏、盤)、池ノ奥窯跡群(土馬)からも出土している。さらに島根県内では、松江市大草 町・出雲国庁跡、同福原町・芝原遺跡(無高台の坏、高台付坏、皿、蓋等)、安来市・高 広遺跡(無高台の坏、高台付坏、皿)での出土例がみうけられる。

ところで、赤色塗彩に用いた顔料物質は、全てベンガラ(酸化第2鉄; Fe_2O_3)である。また、鏡鉄鉱(Specularite;206頁写真図版)という、銀色を呈した赤鉄鉱(2[Fe_2O_3])の一種である鉱物を磨潰すと赤色に発色するとのことであるが、その鉱脈が朝酌・川津地区に所在する嵩山に、僅かだが存在するようである。この鏡鉄鉱が、本遺跡および池ノ奥窯跡群から小さな破片であるが数十片出土している。鏡鉄鉱を採掘してきて、顔料のベンガラを作り出していたのだろうか。興味深い問題点である。

本遺跡は、赤色塗彩を施した土師器と他の出土遺物とを考え合わせると、何らかの祭祀

的な性格を持ち合わせた遺跡とも推察されるが、赤色顔料の一つに成り得ると推定される 鏡鉄鉱の小破片が出土していることから、ここでは祭祀に用いる赤色塗彩を施した土師器 を生産していた可能性も高いのではないだろうか。

註

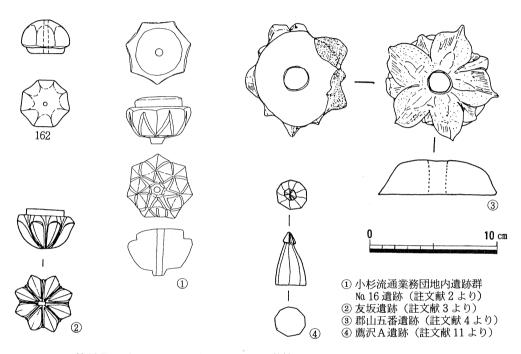
- 註1 松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』1970年
- 註2 本報告書第2分冊「池ノ奥A遺跡」参照。
- 註3 本報告書第2分冊「池ノ奥窯跡群」参照。
- 註4 註1に同じ。
- 註5 松江市教育委員会『芝原遺跡』1989年
- 註6 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984年
- 註7 武庫川女子大学薬学部教授 安田博幸氏, 同助手 森眞由美氏の分析結果による。 本報告書第2分冊「自然科学的考察」第1節参照。
- 註8 島根大学教育学部教授 三浦清氏の御教示による。

[小形台座型土製品について]

小形台座型土製品とは, $C-1(西)\sim E-2$ 区の第1 遺構面上から出土した土師質の土製品(第98図162)の仮称で,島根県内での出土は初めてのものである。しかし,やや形態的には少々異なるが類例としては,富山県で2 例および福島県で1 例の出土品をみることができる。

富山県小杉町・大門町・小杉流通業務団地内遺跡群No.16遺跡出土品(第98図 ①)は、須恵質のもので7枚の蓮弁から構成されており、生焼けのためか灰白色を呈している。径5~5.2cm、高さ3.8cmを測り、上下に4~6 mmの円孔を穿っている。天平~平安時代前期中葉頃のもの。同婦中町・友坂遺跡出土品(②)も、須恵質のもので8枚の蓮弁から構成されている。径3.8~4.8cm、高さは3.2cmを測る。蓮弁の稜線はくっきりと浮き彫りにされ、先端部は鋭く成形されている。長方形の孔が上下に貫通している。奈良・平安時代の作である。福島県双葉町・郡山五番遺跡の出土品(③)は、中央に上下に貫通した円孔を有し、蓮花をあしらっている。径7.7cm、高さ2.7cm、孔径1.8cmとやや大きい。中世以後の土製品のようである。No.16遺跡および郡山五番遺跡の出土品は、本遺跡出土品に比して大きく、しかもこの3遺跡からの出土品には、蓮弁状の文様がみうけられるところに差異がある。これらの小形土製品は、土製仏像(例えば、誕生釈迦仏立像)の台座(蓮華座)とみられている。

本遺跡出土品には、蓮弁状の文様は彫り込まれていないが、漆か何かを塗ったと思われる痕があり、塗彩を施して表したとも考えられるが断定はできない。この部分だけを捉えて本遺跡出土品を、土製仏像の台座(蓮華座)とするのは早計であると思われる。なお、この土製品が出土した遺構面上の覆土内から托と円面硯(95頁第33図109・110)が、上層の堆積土層内からは三段重ねの灯明皿(108頁第49図225)等が出土しており、何か関連があるのかも知れない。



第98図 小形台座型土製品等実測図(1/3)

ところで、本遺跡出土の土製品の形態は、一方では出雲国庁跡から出土した銅製の選にも類似している。大きさもほぼ同じぐらいであり、上面に蓮弁状の文様を入れ上部中央に紐と環を付け、円孔がないのが相似点である。この銅器は、重さが157.77gあり、度量衡の管理もしていたとされている役所からの出土品であるため、分銅ではないかとみられている。同様の銅製品は、静岡県袋井市・坂尻遺跡や同藤枝市・山廻遺跡からも出土しており、分銅と推定されている。しかし、土製品で分銅と推測されるものの例はない模様である。律令制度以降の分銅は、現段階では金属製品が使用されていたとみられているが、重量が乾湿により少々変化する土製品は不向きなのだろうか。しかし、厳密に重さを測っていたかどうかは判らないし、出土したのが役所跡ではないところなので、概ね重さが摑めればよいとして用いたとも考えられないだろうか。因に本遺跡出土品の重量は、晴れた日

で36.45gを測った(平成元年7月7日測定)。

また、近くの薦沢A遺跡からも須恵質の9角錘(④)が出土している。丁寧な作りでそれぞれの面は滑らかである。上段は4角錘を呈し切り込みがあり紐を掛けることができそうである。重さは、8.5gを測る。この9角錘の用途もはっきりしないが、分銅の可能性も考えられないだろうか。

以上のように、本遺跡出土の小形台座型土製品(仮称)について、その用途を類似品から考察したみたが、現段階では不明であると言わざるを得ない。今後資料が増加した時点で明確になるのではないだろうか。

註

- 註1 島根県教育委員会文化課主事 内田律雄氏の御教示による。
- 註2 富山県教育委員会『小杉流通業務団地内遺跡群-第6次緊急発掘調査概要』1984年
- 註3 婦中町教育委員会『友坂遺跡調査報告書』1984年
- 註4 福島県双葉町教育委員会『郡山五番遺跡 』1980年
- 註5 石見国分寺跡から昭和63年度の調査で,7世紀後半白鳳時代の銅造誕生釈迦仏立像が出土している。「石見国分寺跡出土銅造誕生釈迦仏立像について」(島根県文化財愛護協会誌『季刊文化財』64号 1989年)
- 註6 松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』1970年
- 註7 宮本佐知子「古代の度量衡」(町田章編 古代史復元8『古代の宮殿と寺院』講談社 1989年)
- 註8 財団法人大阪市文化財協会 宮本佐知子氏の御教示による。袋井市教育委員会『推定遠江国 佐野郡衙跡坂尻遺跡』
- 註9 註8に同じ。藤枝市教育委員会『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書』奈良時 代〜近世編 1981年
- 註10 松江市竹矢町・オノ峠遺跡から出土した石製品の中に1点分銅ではないかと推定されるものがある。島根県教育委員会「オノ峠遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』1983年
- 註11 松江市教育委員会『薦沢A遺跡·薦沢B遺跡·別所遺跡』1988年

5. 小 結

調査の結果,本遺跡では地山面を含め三つの遺構面を確認し,溝状遺構(SD-02)を伴う掘立柱建物址1棟(SB-01),円形焼土壙11基,建物址を復元するまでには至らなかったが多数のピット,円形土壙5基等を検出した。また,土器も須恵器,土師器の他縄文式土器(後期・晩期),中世の陶器(亀山焼系統他),中国産(?)の白磁片,近世以降の陶器等と出土している。しかし、中心となるものは須恵器と土師器で、全出土量に占める割

合は須恵器が一番多く約2/3近くを占めている。須恵器の形態および赤色塗彩を施した土師器から推察して、本遺跡の営まれていた中心的な時期は、概ね7世紀中頃から9世紀初頭にかけての期間で、特にSB-01の時期は8世紀代と思われる。

SB-01等が検出された C-3・D-3区などの拡張区以外の本遺跡は谷底に位置しており、各遺構面およびその覆土内には石、礫が多量に混じっていたので、自然災害に遭った可能性が強いと思われる。しかも、災害に見舞われてもその後場所を替えず元のところで営みを続けていたものと考えられる。なお、上部の遺構に比べて下の遺構面およびその覆土内の遺物は、出土量が少なくなっていく傾向がみられた。

また、上層の堆積土層からの出土遺物は、池ノ奥C遺跡の特殊土器片および池ノ奥1号墳の須恵器甕片を伴っているので、その他の器種のものも例えば坏とか壺についても、全て本遺跡での営みによる遺物とみることはできないように思われる。

つぎに、本遺跡の性格について考えてみたいと思う。まず、遺構面から考察してみると、掘立柱建物址(SB-01)および建物址に復元するまでには至らなかったがピット群の存在から、ここに小さな集落があった可能性が強い。そして、SB-01に付帯するSD-02やSK-15・16等には粘土塊が残っていたが、イガラビ、池ノ奥周辺で現在みることができる粘土は、土師器の胎土として申し分ないようである。さらに、赤色顔料であるベンガラの原料に成り得るとみられる鏡鉄鉱(Specularite)が、本遺跡内から出土していることと考え合わせると、土師器の出土量が須恵器に比してかなり少ないが、ここでは赤色塗彩を施した土師器の坏類、鍋やその他の甕、壺等を生産していた工房址があったのではとも考えられる。しかも、それを裏付けるかのような壁面は焼け締まっているが、床面はあまり焼けていない円形焼土壙を検出している。この円形焼土壙の用途は、やや大き過ぎるかも知れないが竈を据付た炉の跡とも推察されるが、土師器焼成窯の可能性もあると考えられたいが竈を据付た炉の跡とも推察されるが、土師器焼成窯の可能性もあると考えられた。また、出土遺物をみてみると、土師質の管状土錘がかなりあることや、出雲国風土記の大井地区に関する記載から、ここに生活拠点を持っていた人々は、浜辺からは少し離れてはいるが漁業にも関わりを持っていたのではと推定される。

本遺跡から出土した遺物には、この他にも幾つかの特徴を持つものがみられる。

- ◎土馬 5 個体以上(A~F区)
- ◎ミニチュア土製支脚(須恵質) 1点(B-1区)
- ◎小形坏(土師質) 1点(B-1区)
- ◎球形・円筒形・紡錘形土錘(土師質・須恵質)32点
- ◎ 円面硯 1 ~2?点(D-2区, C-1区?)

- ◎托1点(D-2区)
- ◎灯明皿 2 点 (C-2 · D-区間畔内, C-3区)

以上の何らかの祭祀に用いられたものではと推察されるものである。土馬については, 祈雨, 祈止雨等の水霊信仰との関わり, あるいは, 荒ぶる神に対する生贄の馬の形代とし て神に捧げられたもの。また, 災いや病をもたらす疫病神から免れるため, その乗り物で ある馬(土馬)の脚を折ってその動きを封じるものといった説がある。本遺跡では, 自然 災害, 荒ぶる神への捧げ物であったのだろうか。

さらに、須恵器の坩が31個体以上(特に $F\sim I$ 区に集中して出土)、横瓶8 個体以上($A\sim E$ 区およびC-3区)と他の遺跡に比べて多く出土しているが、これらも祭祀に関わりを持っていたのだろうか。

上記のことから、本遺跡についてまとめてみると、つぎのようになる。

- ① 小さな集落跡。
 - ◎須恵器の出土量が多く、北隣の谷筋に所在する池ノ奥窯跡群 (窯本体は確認できなかったが、本遺跡とほぼ同時期頃と思われる須恵器もよく出土している)を開いた工人集団と密接な繋がりを持っていたのか。例えば生活拠点の一つか。
 - ◎土師器、特に赤色塗彩を施した土師器の制作をしていた工房跡か。
 - ◎漁業にも携わっていたのか。
- ② 祭祀に関わりを持つ遺跡。
 - ◎集落に付帯する祭祀を執り行っていたのか。
 - ©住居内で祭りが行われていた可能性がある。例えば地鎮祭等か(SB-01内の土器 溜り2 はその跡か)。
 - ◎土馬を用いた祭祀を執り行っていたと思われる。

何れにしても、本遺跡だけをみて論ずることは全体を見誤る可能性があり、イガラビ、池ノ奥両地区の各遺跡との相互関係を見極めて検討しなければならないだろう。特に池ノ奥A遺跡の祭祀に関わりを持つ遺物との共通点あるいは相違点については、本遺跡を考えるうえで重要なことであると思われる。

また、今まで朝酌・大井地区では、縄文、弥生時代の遺跡が見つかっていなかったが、本遺跡から後期、晩期の縄文式土器片が6個体分出土した。このことにより、朝酌・大井地区での人の営みが始まった時期が、一気に縄文時代にまで遡れることは注目されよう。今後の資料増加に期待するものである。

註

- 註1 島根大学教育学部教授 三浦清氏の御教示による。
- 註2 財団法人滋賀県文化財保護協会 近藤滋、松沢修両氏の御教示による。滋賀県内に、時期は下るが黒色土師器を焼成した円形焼土壙の検出例があるようである。
- 註3 加藤義成『出雲国風土記参究』(松江今井書店)
- 註4 本報告書第2分冊「池ノ奥窯跡群」参照。
- 註5 本報告書第2分冊「池ノ奥A遺跡」参照。



写真1 C-3区土器溜り1(止)・土器溜り2(下)

池ノ奥窯跡群4号窯附近に見られる金属様破片について

島根大学教育学部 三 浦 清

光沢ある黒色(Steel Gray)の見掛上金属様破片である。筆者のもとで調べたものは二点で、両者は発見場所が異っている。各試料の発見された層準は以下のとおりである。

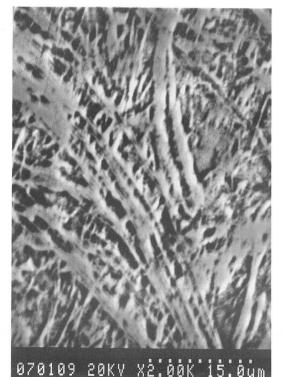
(1): 窯跡 4号アー1区第4層遺物包含層

(2): 窯跡 4号A-W区8層

両試料ともに自形結晶片で、特に(2)の試料は新鮮でやや大きく長径 7 ミリメートル程度 の薄片状をなす。この試料の表面の電顕写真を示しておくが、恐らく天然の鉱物結晶であ ろうと思われる。

両試料の分析値は表に示すとおりで、特に(2)の試料は新鮮な赤鉄鉱であり、(1)の試料は やや変質しているように見える。

この種の金属光沢を示す赤鉄鉱(Hematite)を特にSpeculariteと呼んでいる。 両者ともに、條痕色は赤茶色を示す。従って細粉にすると赤茶色のベンガラになる。



池ノ奥窯跡群 4 号窯附近に見られる 金属様破片の分析値

武料成分	(1)	(2)							
Si	0.33 (Wt %)	0. 13 (Wt %)							
Тi	0.01	0. 62							
Al	0.60	0. 33							
Fe	69. 46	67. 35							
Mn	0. 19	0. 40							
Mg	0.30	0. 53							
P	0. 15	0. 10							
S	0. 11	0. 04							
Fe ₂ O ₃ 換算値	99.31	96. 42							

(1): 窯跡 4号アー1区第4層遺物包含層

(2): 窯跡 4号A-W区8層

出 土 遺 物 観 察 表

縄文式土器

番号	形	態	特	徴	胎	土	色	調	出土	地 点
1			表 隆帯		1 ㎜までの砂粒	:含	淡緑灰色		A-2 • B	-2間畦8層
2					2 ㎜までの砂粒	:含	黒褐色		"	"
33	深	鉢	表 太い沈線,条痕		"		淡黄褐色~黒花	場色	A - 2 11/	星
79			表 二条の沈線		"		黒褐色		B-1 6 Å	3
. 80			表 沈線		4 ㎜までの砂粒	:含	"		" "	
266			表 突帯部刺突文有 三条の沈線 裏	二条の条痕	3 ㎜までの砂粒	:含	表灰褐色,裏	黒褐色	G-1 8層	4

番号	形 態	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	その他	出土地点
4	坏 蓋	11. 0	4. 05	箆切り	伊 箆記号	B-1 8層
5	"	16. 4	3. 5	輪状つまみ・かえり、 ② 箆削り+回転ナデ	例 箆傷有, 重ね焼き痕	A-2 10層上面
6	蓋	23. 1		愛 回転ナデ	大形品	B-2 8層
7	坏 身	10. 0	3. 0	箆切り後ナデ, ②回転ナデ	 自然釉 剝 離	B-1 "
8	"	9. 8	3. 55	箆切り, ❷箆削り+回転ナデ	内箆記号	" "
9	低脚付坏		残) 3.8	❷回転ナデ	低脚部	" "
10	高 坏	14. 4	残 8.2	台形透し(一所), 切り込み(一所)		" "
- 11	"	15. 25	残11.1	三角形透し・切り込み(二方向)		" "
12	高台付壺		残 8.3	静止糸切り,②回転箆削り後回転ナデ		B-2 "
13	坩	9. 0	7. 8	糸切り, 回転ナデ	自然釉付着	B-1 "
14	甕	44. 8	残 18.2	沈線+波状文, 回転ナデ	口頸部	C-1(東)10層上面
15	"	21. 0	残 12.8	口頸部回転ナデ、胴部の平行叩き後カキ目	② 自然釉付着	B-1 8層
16	横 瓶	12. 6		口頸部回転ナデ	口頸部	" "
17	"			例平行叩き後カキ目,充塡痕有	② 自然釉付着	" "
23	坏 身	8. 2	残 1.5	回転ナデ	重ね焼き痕, 例 自然釉剝離	A-1 10層
24	高 坏		残12.45	台形透し・切り込み(二方向)+沈線		B-1 "
25	"		残) 9.2	二段切り込み(二方向)+沈線,回転ナデ		″ 地山面 P 内
26	壺		残 3.5	箆切り後静止ナデ, 回転ナデ		" "
27	長頸壺		残15.7	篦切り後ナデ、炒篦削り+回転ナデ・カキ目有	自然釉付着	A-1 10層
28	甑			突帯部貼り付?,回転ナデ		" "
30	坏 身			例沈線有		B-2 11層
31	"	11. 1	3. 2	糸切り, 回転ナデ		" "
34	坏 蓋	13. 2	3. 2	輪状つまみ・かえり、箆切り、外回転ナデ	重ね焼き痕	A-1 7層
35	"			輪状つまみ、例 箆削り + 回転ナデ	例竹管文2つ有	B-1 "
36	"	12. 4	2. 45	宝珠状つまみ・かえり、 ② 箆削り + 回転ナデ	完形, 重ね焼き痕	B-2 3層
37	坏 身	9. 8	2. 85	篦切り, 🕅 篦削り+回転ナデ	内箆記号, 重ね焼き痕	" "
38	"	10. 2	残 2.5	回転ナデ	重ね焼き痕	A-1 7層
39	"	9. 4	残 1.7	"		" "
40	"	6. 3	2. 25	"	小形品, 磨滅	" "

42 低脚付坏 68 2.8 43 "	篦切り, ❷回転ナデ 三角形透し(4所?) ❷回転ナデ(底・体部境目篦削り) 回転ナデ 低脚型,台形透し 切り込み(一所)	そ の 他 (内) 管記号, (分) 粘土貼り付 低脚部 (ル) 脚部切り込み部分管記号	出土地点 A-1 7層 B-2 6層 A-1 7層 B-1 6層 A-1 4層
42 低脚付坏 68 2.8 43 "	三角形透し(4所?) ②回転ナデ(底・体部境目箆削り) 回転ナデ 低脚型、台形透し 切り込み(一所) " (二方向)	低脚部 "	B-2 6 M A-1 7 M B-1 6 M B-1
43 " 0<	※回転ナデ(底・体部境目箆削り)回転ナデ低脚型、台形透し切り込み(一所)″ (二方向)	11	A-1 7層 B-1 6層
44 高台付坏 15.4 6.4 45 高 坏 姨 2.5 46 " 15.2 9.9 47 " 嫂 8.7 48 廖	回転ナデ 低脚型,台形透し 切り込み(一所) " (二方向)		B-1 6層
45 高 坏 68 2.5 46 " 15.2 9.9 47 " 68 8.7 48 日本 日本 日本	低脚型, 台形透し 切り込み (一所) " (二方向)	脚部切り込み部分箆記号	
46 " 15.2 9.9 47 "	切り込み (一所) " (二方向)	脚部切り込み部分箆記号	A-1 4層
47 " (残 8. 7 48 感	"(二方向)	脚部切り込み部分箆記号	
48 🐯			″ 7層
	沈線+波状文 回転ナデ	竹管文2所,重ね焼き痕	" "
49 " 関8.6	DOM:	口縁部	B-2 6層
	箆切り, Ø 箆削り+回転ナデ・沈線	自然釉付着	B-1 7層
50 把 手		壺の把手	B-2 3層
51 小形壺 残3.1	糸切り?, 回転ナデ	例箆記号	B-1 "
52 "	回転糸切り,回転ナデ	"	A-2 7層
53 壺	箆切り後ナデ, ②箆削り, ②回転ナデ	// 内自然釉付着	A-1 "
54 " 関3.9	回転糸切り、回転ナデ	底部外傷痕	A-2 6層
55 ″ 関 6.6	回転ナデ, 例平行叩き目有, 内指頭圧痕有		B-2 8層上面
56 鉢 24.0 残 6.5	"		″ 7層
57 甑又は鍋		 自然釉剝離	B-1 3層
58 "	口縁端部回転ナデ		" "
59 甑 25.0 22.5	把手付, 例沈線有, 円孔一所に 2穴		B-2 7層
60 土製支脚 3.2	ミニチュア品,三叉突起,ナデ		B-1 3層
61 甕 16.1 残 5.6	口縁部回転ナデ	頸部例押当て具の木口痕有	B-2 "
62 " 19.4 哦39.4	口縁端部凹み有・回転ナデ		″ 7層
63 " 26.0	口縁部回転ナデ	例自然釉剝離	A-2 "
86 坏 蓋 13.3 3.3	輪状つまみ・短いかえり、 ② 箆削り+回転ナデ		D-2 12層下部
87 " 14.0 3.1	輪状つまみ,糸切り, ②回転箆削り+回転ナデ		" " "
88 " 14.8 2.7	″ Ø回転ナデ		" " "
89 坏 身 8.6 2.85	箆切り, 外箆削り+回転ナデ, 内回転ナデ	か自然釉付着,受部ややいびつ	C-1 (西) 12層下部
90 " 10.3 2.85	箆切り後乱ナデ, ②回転ナデ	ほぼ完形	" " "
91 " 10.6 4.15	箆切り後ナデ, 例回転ナデ		" " "
92 " 10.8 ~ 4.1		口縁部楕円形	E-2 15層下部
93 " 12. 0 5. 0 ~13. 5	静止糸切り後ナデ, ②回転ナデ	″ ,重ね焼き痕	D-2 12層 "
94 高台付坏 14.2 4.1	 		E-2 15層 "
95 " 12.6 4.5	糸切り, ②回転ナデ	② 箆記号	D-2 12層 "
96 高 坏 17.6 12.5	台形透し・切り込み (二方向)+沈線		C-1 (西) 12層下部
97 ″)) (残) 5.5	脚部回転ナデ、坏底部の回転篦削り	坏部欠損	D-2 ""
98 鉢 10.0 10.1	ジョッキ型,台座側面篦削り,円孔4所有,	完形	C-1(西) " "
99 長頸壺 残14.7	底部の回転箆削り,体部の箆削り+回転ナデ	⑦ 自然釉付着	" " "
100 ")	肩部のカキ目,他回転ナデ	" "	C-2 " "
101 高台付壺 🥞 8.9	箆切り後ナデ, 回転ナデ	例 " (底部)	C-1 (西) " "
102 曝) (残 7. 2	体部下半例箆削り、他回転ナデ	Ø "	D-2 ""
103 甕 🥦 🥦 24.85	頸部沈線+波状文・回転ナデ	" "	C-1(西) " "
104 " 40.0 残18.7	沈線+波状文・回転ナデ	″ 口頸部	D-2 " "

須	恵	12						
番号	形	態	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	その他	出出	地 点
105	甕			残35. 2	胴部と底部別々に成形,例平行叩き後カキ目		C-1 (西) 12層下部
106	把	手			先端部切れ込み有、挿入式		D-2	" "
107	甑又は	鍋		残 9.3	例 平行叩き,口縁端部回転ナデ,他ナデ	口縁部	C-1 (西) " "
108	横	瓶	14. 0	27. 0	体部開口部円形粘土板で蓋をしている	肩部箆記号	D-2	" "
109	托			残1. 25	箆切り		"	16層
110	円面	硯	14. 9	2. 8	静止糸切り	使用痕跡なし	"	"
111	坏	蓋	16. 6	3. 0	輪状つまみ・かえり、箆切り後ナデ 外箆削り+回転ナデ		"	17層上面
112	"		18. 0	2. 9	輪状つまみ・かえり、回転箆切り後ナデ 外回転箆削り+回転ナデ		C – 2	"
113	"		16. 4	2. 65	輪状つまみ・かえり	例 自然釉剝離	D - 2	"
114	"		14. 8	3. 4	輪状つまみ,例箆削り+回転ナデ		" ,	"
115	"		14. 6	1. 65	" "		"	"
116	"		14. 6	2. 3	輪状つまみ,静止糸切り後ナデ 外篦削り後回転ナデ	完形	C - 2	"
117	蓋				輪状つまみ剝離,天井部内外面カキ目有	大形品,中心に円孔有	D-1	"
118	坏	蓋	14. 2	2. 7	輪状つまみ、静止糸切り、 ②回転ナデ	輪状つまみの口径大	C-2	"
119	蓋		19. 3	3. 5	宝珠状つまみ・かえり、 例節削り+回転ナデ	重ね焼き痕, 🖰 箆痕有	D-2	"
120	坏	蓋			乳頭状つまみ, 🕅 回転ナデ		D-1	"
121	坏	身	10. 5	3. 8	箆切り後ナデ "	ほぼ完形	"	"
122	"				" "		C-2 • D-	2間畦 17層上面
123	"		8. 7	3. 15	糸切り後ナデ, 回転ナデ	小鉢型	C-2	17層上面
124	"		13. 0	5. 6	静止糸切り,例回転ナデ	重ね焼き痕	"	"
125	"		12. 8 ~13. 6	4. 65	" "	口縁部楕円形,重ね焼き痕	E-1	"
126	"		12. 6	3. 9	糸切り指押痕有, 例箆削り+回転ナデ	例沈線有, 内焼成後の篦痕有	D-2	"
127	高台作	寸坏	13. 6	5. 1	❷回転篦削り+回転ナデ	 	C-2	"
128	"		11. 8	5. 3	⑦ 箆削り後ミズヒキ	例自然釉付着	E-1	"
129	"				箆切り後ナデ, 🕅 回転ナデ	外 篦記号	D-2	"
130	"		10. 0	3. 85	〃 例箆削り+回転ナデ	自然釉付着	"	"
131	"		10. 4	4. 2	" ∅回転ナデ		C-2	"
132	"		16. 7	3. 9	" "		C-2•D-	2間畦 17層上面
133	"		14. 0	5. 05	静止糸切り後ナデ、②回転ナデ		C-2	17層上面
134	"		12. 6	残 3.7	∥ ❷箆削り+回転ナデ		"	"
135	"		13. 6	5. 1	静止糸切り, ②回転ナデ	体・底部境目に薄い沈線有	D-2	"
136	高	坏	15. 9	12. 15	台形透し・切り込み(二方向)+沈線		E-1	"
137	"			残9. 75	切り込み (二方向)	片側「Ϋ」形	D-1	"
138	鉢	:	14. 8	残 7.2	❷篦削り+回転ナデ, 4条の沈線		D-2	"
139	"			残 5.0	静止糸切り, ②回転ナデ	外 篦記号	C-2	"
140	長頸	壺	11. 0	残 5.7	回転ナデ	口頸部	D-1	"
141	"		15. 6	残 5.8	"	"	C-2	"
142	短頸	壺	8. 0	5. 6			E-1	"
143	小形	壺		残) 6.6	静止糸切り後ナデ、回転ナデ	例 自然釉剝離	D-2	"
144	長頸	壺		残16. 4	回転ナデ	胴部, 鈕の剝離痕有	E-2	"
145	小 形	壶		残 7.1	胴部下半砂箆削り,他回転ナデ	高台付	C-2	"
146	壺	ŧ		(残)10.25	⊗平行叩き後カキ目	胴部片, 円孔有	D-2	"

浿	忠 器					
番号	形 態	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	その他	出土地点
147	坩	4. 6	4. 8	⑦ 粗い箆削り+回転ナデ		D-2 17層上面
148	璲		残 9.7	⑦箆削り+ミズヒキ	不完全沈線有	E-1 "
149	提 瓶	7. 0	(残) 3. 3	回転ナデ	口頸部, 自然釉剝離	" "
150	横瓶	12. 0	26. 6	体部開口部円形粘土板で蓋をしている	肩部箆記号 焼き台・自然釉付着	D-2 "
165	長頸壺	7. 7	16. 7	箆切り後ナデ, 回転ナデ	ほぼ完形, 自然釉付着	D-1地山面P1内
166	坏 蓋	13. 4	3. 3	輪状つまみ、箆切り、例箆削り+回転ナデ	重ね焼き痕	C-2 17層
167	"	14. 8	3. 0	" "		" "
168	"	14. 6	3. 2	〃 例節削り+回転ナデ	⑦ 箆傷有,重ね焼き痕	" "
169	"	14. 0	2. 3	輪状つまみ,箆切り後ナデ 外箆削り後ナデ+回転ナデ	重ね焼き痕	" "
170	"	14. 75	1. 8	宝珠状つまみ・かえり	(內箆記号, 例)自然釉付着	D-1 "
171	"	12. 5	3. 4	宝珠状つまみ, ②箆削り+回転ナデ		C-2 "
172	坏 身	9. 0	2. 6	篦切り,例 回転ナデ		C-1(西) 17層
173	高台付坏	10. 8	4. 2	箆切り後ナデ,②箆削り+回転ナデ		C-2 17層
174	"	15. 0	4. 9	// 例回転ナデ		D-2 "
175	"	14. 2	4. 0	例箆削り+回転ナデ		C-2 "
176	"	13. 0	4. 9	静止糸切り, 例回転ナデ		" "
177	"	14. 5	5. 8	静止糸切り後ナデ、例回転ナデ	内 篦記号	" "
178	"	15. 0	5. 45	回転糸切り, 例回転ナデ	底部例爪痕	E-2 "
179	高 坏		残 6.8	切り込み (二方向)	坏部内箆記号	D-2 "
180	"		残 5.0		脚部箆記号	C-1 (西) 17層
181	高台付壺		残 6.4	箆切り後ナデ,例回転ナデ		C-2 17層
182	坩	7. 2	8. 8	″ 回転ナデ	自然釉付着,重ね焼き痕	E-1 "
183	噻		残 7.3	箆切り, ❷箆削り+回転ナデ, 沈線	"	C-1(西) 17層
184	甕	20. 8	残 7.3	頸部沈線・回転ナデ	肩部気泡有, 例 自然釉付着	" "
185	"		残18. 4	例平行叩き後カキ目,胴・底部別々に成形		C-2 17層
186	"		残16.4	沈線+波状文,回転ナデ	口頸部	E-1 "
187	"	19. 2	残36.6	口頸部沈線・回転ナデ	自然釉剝離	C-2 "
188	甑		残16.5	円孔(4所),底部端箆削り,他回転ナデ		" "
192	坏 蓋	12. 4	残 3.6	体部中央に稜・口縁内面に薄い沈線有	自然釉付着	D-2 16層
193	"	8. 4	2. 8	かえり、箆切り、回転ナデ	小形品,重ね焼き痕	C-1(西) 12層
194	"	9. 6	残 3.5	宝珠状?つまみ剝離・かえり,例箆削り+回転ナデ	" 自然釉剝離	D-1 9層
195	"	13. 8	2. 9	輪状つまみ	自然釉付着	D-2•E-2間畦 16層
196	坏 身	11. 0	3. 25	箆切り後ナデ,回転ナデ	内 箆記号,例 自然釉付着	C-1 (西) • D-1間畦 12層
197	"	10. 6	2. 7	〃 例箆削り+回転ナデ	⊕ "	C-1(西)8層
198	"	9. 2	3. 6	篦切り, 例回転ナデ		E-1 9層
199	"			篦切り後ナデ, 例篦削り+回転ナデ	内篦記号	D-2 12層
200	"	11. 2	2. 75	篦切り, 例回転ナデ	"	D-1 8層
201	"	11. 2	3. 45	篦切り後ナデ, 例 篦削り+回転ナデ	② 自然釉付着	C-2 10層
202	"	16. 0	2. 75	回転糸切り、回転ナデ	″ 重ね焼き痕	E-2 12層
203	低脚付坏		残 4.1	切り込み (二方向), 例回転ナデ		C-2 "
204	坏蓋・身		残 2.8	回転ナデ	重ね焼き溶着	D-2 9層
205	高 坏	14. 9	9. 45	三角形透し(二方向)		D-1 "

番号							
	形	態	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	その他	出土地点
206	高	坏		残 8.2	切り込み (二方向)	重ね焼き痕	C-1 (西) • D-1 間畦12層
207	"			残 6.4		竹管文2つ有	C-1(西)12層
208	"			残 8.1		1	" "
209	"			残 3.3		例 柿渋塗布(赤茶褐色)	D-1 "
210	"			残 8.6	低脚型		C-1(西) "
211	壺			残14.6	箆切り, ❷箆削り+回転ナデ	底部內指頭圧痕有	D-2 "
212	坩		7. 6	残 4.9	頸部ボタン状飾り有,回転ナデ		D-1 9層
213	"		6. 1	残 3.6	内沈線有,回転ナデ		C-1 (西) • D-1 間畦12層
214	甑			残 7.7	口縁部回転ナデ		C-1(西)12層
215	"			残 8.2	② 平行叩き有		E-1 9層
216	"		24. 4	残13.2	⑦沈線有,口縁部・ の回転ナデ,他叩き	把手付	D-2 "
217	"			残13.2	の底部端平行叩き・他刷毛目, の回転ナデ, 円孔有	内穿孔時の指押痕有	E-1 "
218	甕				沈線+波状文,回転ナデ	口縁部, 四自然釉剝離	D-2 "
219	"		27. 2		回転ナデ	例竹管文有, 例自然釉付着	E-2 "
220	"		43. 2	残12.8	沈線+波状文,回転ナデ	口頸部	D-1 "
221	"		36. 2	残15.8	" "	"	E-1 "
222	横	瓶	13. 0	残 3.4	回転ナデ	〃 頸部内指頭圧痕有	E-1 12層
223	壿					イガラビ1号墳出土品とは別型	C-2 • D-2 間畦 5 層
224					❷箆削り後ナデ+回転ナデ	硯の可能性有	C-1 (西) 8層
225	灯 明	m		3. 0	三段型一体成形,回転糸切り,回転ナデ		C-2 • D-2間畦 9層
226					底部内カキ目,脚部刷毛目有	脚部三角柱状	D-2 8層
227						池ノ奥C遺跡特殊土器片	″ 9層
228						"	" "
242	坏	身	9. 0	4. 2	箆切り, 外回転ナデ		G-1 7層
243	低脚付	坏		残) 2.8	❷回転ナデ	脚部	F-1 "
244	壺		8. 8	3. 8	回転ナデ	肩部内指頭圧痕有	" "
245	坩		5. 2	5. 6	篦切り, 🗫 篦削り + 回転ナデ, 🗷 回転ナデ	自然釉付着	G-1 "
246	"		6. 4	7. 0	" "	② 自然釉付着	F-2 • G-2 間畦 7 層
247	"		6. 0	6. 45	② 箆削り + 回転ナデ	〃 (倒置)	F-1 • G-1間畦 ″
248	"		5. 3	残3.25	頸部~肩部沈線有,回転ナデ	"	" "
249	把	手				一部自然釉付着	G-1 7層
250	甕		16. 6		口頸部回転ナデ		F-2 "
251	坏	蓋		残2.65	宝珠状つまみ、回転糸切り、必箆削り+回転ナデ		F-1 12層上面
252	坏	身	11. 4	4. 4	回転糸切り,例回転ナデ		G-1 8層上面
253	小形	壺		残6.75	箆切り,例箆削り+回転ナデ,例回転ナデ	例 自然釉付着(倒置)	" "
254	坩		6. 4	6. 5	❷箆削り+回転ナデ, ❷回転ナデ	自然釉付着	F-1 12層上面
255	"		6. 2	6. 7	箆切り, 例箆削り+回転ナデ, 例回転ナデ		" "
256	"			残 4.0	肩部ボタン状飾有, ② 箆削り+回転ナデ		" "
257	"		6. 2	6. 6	篦切り, 例篦削り+回転ナデ		G-1 8層上面
258	"			残 4.8	" "	底外面粘土塊付着	" "
260	坏 :	身	8. 6	4. 0	// 例回転ナデ	例 自然釉付着	″ 8層
		Г	8. 8		回転ナデ	例篦記号	" "

浿	思	\$\$					
番号	形	態	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	その他	出土地点
262	小形	壺		残 2.6	箆切り, 必箆削り+回転ナデ		G-1 8層
263	坩		6. 4	6. 5	"	内自然釉付着	〃 12層上面
264	"			残 5.1	" "	自然釉付着	" "
265	"		6. 0	(残 4.7	回転ナデ	外 自然釉付着	" "
267	低脚作	坏		残3.05	外回転 ナデ		F-1 12層
268	坏	蓋	13. 15	4. 5	突帯有, 必箆削り+回転ナデ		〃 13層上面
269	坩		6. 2	6. 2	箆切り,回転ナデ,肩部沈線有	自然釉付着	" "
270	"		5. 6	6. 0	" "	 自然釉付着	" "
271	"			残 4.4	〃	自然釉付着	" "
272	長頸	壺		(残11.1	" " "	·	" "
277	坏	身	10. 7	2. 8	例箆削り後回転ナデ,	底外面粘土塊貼付	G-1 5層
278	坏(針	k)			静止糸切り	重ね焼き痕	F-2 "
279	坩		6. 0	7. 0	篦切り後ナデ、例篦削り+回転ナデ、(内回転ナデ	② 自然釉付着	F-1 "
280	"			残 3.4	箆切り, 🕅 箆削り + 回転ナデ, 沈線有		G-2 "
281	坏	蓋	10. 8	1. 5	つまみ無・かえり、箆切り、🔊 回転ナデ	自然釉剝離	H-1 4層
282	坏	身			回転糸切り		H-2 5層
283	壺		17. 2	残 4.3	回転ナデ		I-2 3層
284	小形と	壺飕				例 自然釉付着 (倒置)	H-2 5層
285	坩		5. 8	5. 75	箆切り, 外箆削り+回転ナデ, 内回転ナデ		I-1 4層
286						暗茶灰色	C-3表土
287	灯明	Ш		残 2.0	糸切り	② 自然釉付着	″ 2層
288	坏	蓋	14. 6	3. 2	輪状つまみ,例箆削り+回転ナデ	灰かぶり	〃 土器溜り1
289	"		15. 6	2. 35	″ 箆切り, ⑦ 箆削り + 回転ナデ	重ね焼き痕	" "
290	坏	身	11. 6	3. 6	回転糸切り, ②回転ナデ		" "
291	"		14. 8	4. 5	回転糸切り後ナデ、例回転ナデ		" "
292	高台付	坏	13. 2	4. 9	箆切り後ナデ, 🏿 回転ナデ	-	" "
293	"		14. 2	4. 6	静止糸切り後ナデ, ②回転ナデ		" "
294	高	坏	13. 3	残 3.8	例回転ナデ	坏部	" "
295	鉢		16. 9	7. 6	❷箆削り+回転ナデ	() 自然釉剝離	" "
296	"			残 5.0	回転糸切り,例箆削り+回転ナデ		" "
304	坏	蓋	15. 2	2. 95	輪状つまみ、篦切り後ナデ、外篦削り+回転ナデ	天井部の竹管文有 重ね焼き痕	" SB-01P1内
305	坏	身		残 2.0	静止糸切り	±10/01C IX	" " "
306	高台付	坏		残 2.9	篦切り後ナデ, ※回転ナデ		" " "
307	"			残 3.1		磨滅	" " "
308	"		13. 0	4. 5	静止糸切り, ②回転ナデ		" " "
309	"		13. 6	4. 9	" "	例 自然釉付着,重ね焼き痕	" " "
310	高	坏		残 7.6	切り込み (二方向)		" " "
316	Ш		15. 5	3. 8	糸切り, ②回転ナデ	高台付	″ ″ P7内
332	坏	蓋	14. 1	4. 2	輪状つまみ、例箆削り+回転ナデ	ほぼ完形, 重ね焼き痕	″ SD-02内
333	"		15. 5	残 3.8	静止糸切り ″	輪状つまみ剝離線痕有	″″″3群
334	"		13. 8	2. 75	輪状つまみ、箆切り後ナデ	例 自然釉付着	″″″1群
335	"		15. 6	2. 6	″ 外回転ナデ	ほぼ完形,灰かぶり 重ね焼き痕	″ ″ 4群
						里4gがごび	

番号	形	態	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	その他	出	土 地 点
336	坏	身		残 3.0	静止糸切り,回転ナデ		C-3	SD-02内 1群
337	^	,	15. 4	4. 25	糸切り,回転ナデ,沈線状凹線有		"	″ 5群
338		,	15. 7	5. 5	箆切り, ②箆削り+回転ナデ		"	″ 2群
339	高台	付坏	13. 5	4. 7	静止糸切り後ナデ, ②回転ナデ		"	" "
340	題	ķ		残 5.3	一条の沈線,回転ナデ		"	// 4群
357	蘇	哥	43. 2	残)22.5	口縁部櫛状工具によるナデ,端部平坦	把手付, 表面剝離, 焼成不良	"	SK-16内
358	坏	蓋	15. 6	2. 1	輪状つまみ,天井部内面沈線状カキ目	 自然釉付着	"	SB-01内
359	坏	身	14. 1	4. 9	静止糸切り, ②回転ナデ		"	"
360	高台	付坏	12. 8	4. 8	静止糸切り後ナデ, ②回転ナデ	ほぼ完形	"	"
361	横	瓶	5. 55	22. 65	体部の叩き目不明瞭	肩部箆記号,焼き台付着	"	"
362	重	ž	15. 5	残 5.6	肩部の平行叩き,他回転ナデ		"	SB-01床面10群
364	碧	E.	20. 0	残10.8	口頸部回転ナデ	自然釉付着	"	削平部土器包含層
377	小用	多壺		残 2.0	箆切り, 例回転ナデ	内自然釉付着	D-3	SD-01底面
380	坏	身	15. 4	5. 0	静止糸切り, 例回転ナデ	重ね焼き痕	"	地山面
381	小用	彡壷	6. 6	残 2.0		短頸壺型?	"	"
384	坏	身	13. 0	残 2.5	回転ナデ		排土	
385	壺	類	14. 0) 3.2	"	頸部箆記号	不 明	
386	,	,	17. 6	残 8.3	"	"	"	
			L	4				

土 師 器

番号	形 態	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	その他	出土地点
18	坏	7. 8	1. 2		小形品, 磨滅	B-1 8層
19	壺			ナデ		A-2 "
20	甕	20. 2	残 3.7	胴部内箆削り,他ナデ		B-1 "
21	竃					" "
32	壺	15. 8	(推)19.0	胴部の刷毛目,他ナデ		B-2 11層
64	坏			静止糸切り	磨滅	A-2 3層
65	長頸壺		残 7.0	赤色塗彩,沈線有(二条),回転ナデ	頸部	A-1 7層
66	把 手				小形品	B-1 3層
67	"					〃 7層
151	坏			赤色塗彩,暗文(円弧)有,箆切り後ナデ		D-2 17層
152	"			〃 箆切り後ナデ,回転ナデ		″ 17層上面P内
153	甕	15. 2	残 3.2	胴部内箆削り,他ナデ		C-1 (西) 12層下部
154	"	22. 8	残 4.2	" "		" "
155	"	20. 4	残 9.5	口頸部回転ナデ、胴部の刷毛目内箆削り		D-2 17層上面
156	"	23. 6	残 4.0	〃 胴部内箆削り	胴部外磨滅	C-2 "
157	把 手			箆調整		" "
158	"					" "
159	竃					D-2 "
160	土製支脚		残11.6	三叉突起		E-1 "
161	"		残16.1	"		" "
162	小形台座 型土製品		2. 75	上部8面,上下に円孔(径3.75㎜)有	漆付着?, 36.45 g	" "

土 師 器

\mathbf{I}	함마 공동					
番号	形 態	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	その他	出土地点
189	坏		残 2.8	赤色塗彩、箆切り後ナデ	磨滅	C-2 17層
190	甕 類			内回転ナデ	"	E-2 "
191	"	22. 0	残 5.6	口頸部回転ナデ、胴部の箆削り	"	C-2 "
229				内外面カキ目		C-2・D-2 間畦 10層
230	坏			赤色塗彩,回転糸切り	磨滅	〃 9層
231	壺・甕類	21. 4	残10.0	口縁部の回転ナデ、胴部の箆削り、他刷毛目	胴部例黒斑有	C-1 (西) 12層
232	"	30. 0	残19.7	胴部 例刷毛目 内篦削り,他回転ナデ		E-2 9層
233	竃					" "
234	土製支脚		残18.1	三叉突起		C-1 (西) 12層
235	"		残12.8	. "		D-1 8層
259	壺	20. 3	残 8.5	の口縁部回転ナデ・他刷毛目		F-1 12層上面
273	短頸壺	10. 65	8. 7	ナデ	ほぼ完形, 例 指押痕・黒斑有	〃 13層上面
274	壺	12. 2	残 6.0	沈線有, 🔗 口頸部回転ナデ・他刷毛目	伊磨滅	" "
297	坏	12. 7	3. 0	赤色塗彩 (剝離)	磨滅	C-3土器溜り1
298	"			〃 例回転ナデ		" "
299	短頸壺	11.8	残 4.5	〃 回転ナデ	列 黒斑有	" "
300	把 手			〃 断面扁平	301と同一個体	" "
301	鍋		残 8.5	"	把手付, 磨滅	" "
302	把 手			" 断面扁平	300,301と同一個体の可能性有	" "
303	"			体部外面接合		" "
311	坏			赤色塗彩,静止糸切り		″ SB−01 P1内
312	Ш	18. 0	2. 6	赤色塗彩,ロクロ回転箆切り(同心円痕有) ②回転ナデ		" " "
313	"	16. 0	2. 0		磨滅	" " "
314	土製支脚			円孔有		″ ″ P6内
315	"			"		" " "
317	坏	16. 3	残 3.3	赤色塗彩,回転ナデ		〃 土器溜り2
318	"	13. 7	残 3.4	"	体部例黑斑有, 磨滅	" "
319	"	14. 4	残 3.9	″ 回転ナデ	黒斑有	" "
320	"	16. 5	残 3.7	" "		" "
321	"	14. 8	残 3.0	" "		" "
322	"	17. 0	残 3.7	赤色塗彩(剝離)	磨滅	" "
323	"	13.8	残 3.0	"	"	" "
324	"		残 1.5	赤色塗彩, 箆切り, 体底部境目箆削り	底部の多方向に線痕有	" "
325	"			″ 回転糸切り	底部例黒斑有	" "
326	"		残 1.6	〃 糸切り後ナデ	磨滅	" "
327	"			〃 糸切り	"	" "
328	"	(推13.0	曲 3.6	赤色塗彩(剝離)	底部例黑斑有, 磨滅	" "
329	高 坏	16. 2) 2.5	赤色塗彩,回転ナデ	坏部	" "
330	甕	26. 0	残 4.0		磨滅	" "
331	"	29. 6	残 4.0	胴部例刷毛目	"	" "
341	坏	10. 3	残2.35	赤色塗彩 (剝離)	"	″ SD-02内5群
342	"	14. 8	残 3.1	"	"	″″″4群

土 師 器

ユ	되나 목당						
番号	形 態	口径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	その他	出	土地点
343	坏)残 1.5	赤色塗彩(剝離)	磨滅	C-3	SD-02内6群
344	"		残 1.9	"	"	"	″ 3群
345	"		残 1.7	赤色塗彩	"	"	″ 6群
346	"		残 2.4	赤色塗彩(剝離)	"	"	″ 5群
347	"		残 1.8	"	〃 342と同一個体の可能性有	"	″ 3群
348	m	18. 8	残 3.0	赤色塗彩,口縁部回転ナデ	"	"	″ 4群
349	"	20. 1	残 2.2	赤色塗彩 (剝離)	"	"	// 3群
350	"	21. 9	残 2.0	"	"	"	″ 4群
351	"			赤色塗彩,口縁部回転ナデ	"	"	// 3群
352	壺・甕類	19. 4	继 21. 6	胴部のカキ目,他ナデ		"	″ 2群
353	"	21. 2	残 6.6	胴部内箆削り,口頸部回転ナデ	磨滅	"	″ 5群
354	"	24. 0)残 13. 2	胴部内箆削りの刷毛目		"	"
355,	把 手			断面扁平,体部外面接合		"	// 6群
356	"					"	" "
363	坏	15. 4	3. 7	赤色塗彩,回転糸切り,回転ナデ		"	SB-01床面
365					土馬の脚(尾)もどき	"	削平部土器包含層
366	坏	13. 5	侇 4. 15	赤色塗彩 (剝離)	磨滅	"	"
367	"	14. 1) 2.9	"	"	"	"
368	"	15. 8	侇 3.3	"	口縁部,磨滅	D - 3	SD-01内6層
369	"	15. 0	残 2.8	赤色塗彩,回転ナデ	"	"	"
370	"	15. 4) 3. 15	赤色塗彩(剝離)	〃 磨滅	"	"
371	"			赤色塗彩,回転ナデ	"	"	"
372	"			"	〃 磨滅	"	"
373	"			″ 回転ナデ	高台部	"	"
374	"			赤色塗彩 (剝離)	″ 磨滅	"	"
375	" "			赤色塗彩	" "	"	"
376	Ш	15. 6	2. 3	〃 回転ナデ		"	"
378	坏	16.6	残 2.5		磨滅	"	SD-01底面
379	甕	24. 5		回転ナデ		"	"

陶磁器

番号	種	類	形 態	口径 (cm)	器 高 (cm)	形態・手法・その他	出土地点
3	磁	器	つまみ			白磁, 中国産?	B-1 10層上面P内
81	陶	器				常滑焼, 例 自然釉付着	″ 3層
82	"		擂 鉢			備前焼	" "
83	"		m	28. 0	残 3.7	亀山焼系統, 磨滅	C-1(東) 6層
163	"					〃	C-2 17層上面
240	"					〃 例格子叩き 〃	D-1・E-1間畦表土
241	"					〃 🔗 平行叩き 〃	D-1 5層
382	"					高台付(削り出し), ※回転ナデ	G-3表土
383	"		擂 鉢			近世以降、口縁部、回転ナデ	" "
388	"		Ш			高台付(削り出し), 釉有, 砂目痕(重ね焼き痕)	不明

土馬(須恵質)

番号	形り	態部	位	性 別	形態・手法の特徴	7 0	り他	出	土地点	
22		1	脚					B-1	8層	
68	裸 ,	馬 右	胴後 肢	雄	男根(粘土貼り付)・肛門孔有	現存長	14.6 cm	A-1	6層	
69	"		胴	表現なし	肛門孔有	"	10.8 cm	B-1	7層	
70			脚					"	3層	
71			<i>"</i>					A — 1	6層	
72			"					"	7層	
73			"					B-1	6層	
74			"		牛の脚?			A-1	4層	
75			"		牛の脚?,74と同一個体?			B-1	3層	
76		J	毣					"	"	
77			"					A-1	4層	
78			//					B−1 • C	-1(東)間畦	6層
236	裸 ,	Ę į	同	雄	男根(粘土貼り付)有, 焼成前柿渋塗布赤褐色に発色	現存長	7.4 cm	D-1 •	E-1間畦 9)層
237		Ą	却					D-1	9層	
238		J	€					"	5 層	
239			"					E-1	8層	
275	裸	E F	同	表現なし		現存長	7.8 cm	F - 1	12層	
387	"		"	"	肛門孔有	"	5.6 cm	排土		

土錘(土師質)

番号	形 態	長さ(cm)	径 (cm)	重量(g)	色	e i	周	成 形	状 態	出土地点
390	管 状	2. 0	1. 3	2. 5	赤	褐	色	巻き付け	ほぼ完形	B-1 2層
391	"	3. 1	0. 8	1. 5		"		"	"	B-2 3層
392	"	3. 7	1. 2	3. 8	黄	橙 褐	色	"	"	A-1 "
393	"	3. 55	1. 45	6. 0	黄	褐	色	"	"	" "
394	"	3. 7	1. 5	6. 3	暗	褐	色	"	"	B-1 "
395	"	3. 95	1. 5	8. 0	赤	褐	色	"	"	" "
396	"	(3.0)	0. 7	(1. 15)	淡	赤褐	色	"	約%欠	A-1 "
397	"	(2.7)	0. 75	(1.2)	淡	黄 橙 褐	色	"	"	B-1 "
398	"	5. 1	2. 5	(26.6)	暗	茶 褐	色	"	"	B-2 6層
399	"	(2.5)	0. 8	(1. 25)	赤	褐	色	"	約 ½ 欠	B-1 3層
400	"	(2.7)	0. 75	(1.0)		"		"	約 ¼ 欠	″ 2層
401	"	(2.7)	0. 8	(1.2)	黄	橙 褐	色	"	"	" "
402	"	3. 15	0. 8	(1.35)	赤	褐	色	"	"	C-1(東) 6層
403	"	4. 8	1. 7	(9.0)	黄	橙 褐	色	"	約 % 欠	A-1 7層
404	"	(1.85)	0. 85	(0.85)	赤	褐	色	"	約 ½ 欠	B-1 3層
405	"	(2.75)	0. 8	(1. 35)		"		"	"	A-1 "
406	"	(2.5)	0. 8	(1. 45)	橙	白	色	"	"	B-1 "
407	"	(2.6)	0. 9	(1. 35)	赤	褐	色	"	約½欠	″ 2層
408	"	(2. 15)	0. 9	(0.8)		"		"	"	B-2 6層
409	"	(1. 95)	0. 7	(0. 85)		"		"	"	B-1 3層

土錘(土師質)

番号 410 411 412	形 態 管 状	長さ(cm) (1.9)		重 量 (g)	色 調	成 形	状 態	出土地点
411		(1, 9)						1
			0. 75	(0.9)	淡 黄 褐 色	巻き付け	約 ½ 欠	A-1 6層
412	"	(2.6)	0. 9	(1. 2)	赤 褐 色	"	"	B-1 2層
	"	3. 7	2. 2	(8.0)	淡 黄 橙 褐 色	"	"	″ 3層
413	"	(1.9)	1. 1	(1. 75)	赤 褐 色	"	"	" "
414	円筒形	2. 5	2. 45	11. 85	淡褐色~淡赤褐色	"	ほぼ完形	〃 2層
415	"	2. 45	2. 55	15. 25	黄 橙 褐 色	"	"	″ 3層
416	"	3. 3	2. 9	(24.45)	淡 褐 色	"	約 % 欠	A-1 4層
417	"	3. 0	2. 8	(22. 9)	"	"	約 % 欠	″ 6層
418	"	2. 3	(2.5)	(5. 1)	黄 橙 褐 色	"	約½欠	B-1 3層
419	"	2. 55	(2.7)	(7.8)	黄褐色~灰色	"	約%欠	A-1 4層
420	球 形	2. 6	3. 0	19. 35	淡褐色~淡赤褐色,一部煤付着	"	ほぼ完形	B-1 3層
421	"	2. 85	3. 15	22. 1	淡 黄 褐 色	2 方向穿孔	"	A-1 4層
422	"	1. 65	2. 45	(7. 5)	赤 褐 色	巻き付け	約 5 欠	A-1・B-1間畦表土
423	"	3. 2	(3. 4)	(25. 2)	淡褐色~赤黄褐色	2 方向穿孔	約½欠	A-1 4層
424	紡 錘 形	3. 0	1. 7	5. 8	黄 橙 褐 色	巻き付け	ほぼ完形	B-1 2層
425	"	3. 1	1. 85	8. 5	暗 黄 橙 褐 色	"	"	〃 7層
426	管 状	4. 05	1. 8	(8. 9)	暗褐色~橙白色	"	約 % 欠	B-2 8層
427	球 形	2. 45	2. 95	19. 9	淡褐色~淡赤褐色	"	ほぼ完形	B-1 10層上面P1内
428	"	3. 3	3. 2	(23. 75)	淡 橙 褐 色	"	約	A-1地山面P1内
429	紡錘形	2. 9	3. 4	29. 45	黒灰色~明褐色	"	ほぼ完形	A-2 11層
430	管 状	2. 6	0. 75	1. 45	淡 赤 灰 色	巻き付け, 磨滅	"	C-2 12層
431	"	3. 85	0. 8	2. 1	淡 黄 橙 褐 色	巻き付け, 剝離	"	" "
432	"	3. 2	0. 85	2. 4	暗 褐 色	巻き付け	"	〃 9層
433	"	2. 75	1. 05	2. 6	"	"	"	D-1 "
434	"	4. 1	1. 05	3. 05	赤褐色	"	"	〃 5層
435	"	3. 7	1. 15	3. 55	黄 褐 色	"	"	" "
436	"	3. 7	1. 55	6. 25	黒 褐 色	"	"	D-2 9層
437	"	4. 8	1. 35	6. 35	暗 灰 色	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	"	E-1 8層
438	"	3. 4	1. 75	8. 2	灰白色 ~ 黒灰色	巻き付け, 磨滅	"	C-1(西) 8層
439	"	4. 2	1. 7	8. 7	淡 黄 橙 灰 色	巻き付け	"	C-2 9層
440	"	4. 3	1. 75	9. 15	淡 褐 色	巻き付け,ナデ調整	"	C−1 (西)• D−1間畦12層
441	"	4. 5	1. 6	9. 2	灰白色~暗灰色	巻き付け	"	C-2 9層
442	"	4. 0	1. 8	11. 0	黒 褐 色	"	"	C-1(西) 8層
443	"	3. 7	2. 0	11. 1	灰 色	巻き付け, 磨滅	"	" "
444	"	(2.7)	0. 9	(1. 6)	淡 黄 橙 褐 色	巻き付け	約%欠	C-2 12層
445	"	(2. 55)	1. 1	(2.5)	赤 褐 色	"	"	C-1(西) 8層
446	"	(2.9)	0. 8	(1. 2)	"	"	約%欠	D-1表土
447	"	3. 7	0. 9	(2.2)	"	"	約 % 欠	C-1(西) 8層
448	"	3. 4	1. 4	(4. 75)	黒灰色~暗灰色	"	"	E-1 5層
449	"	4. 6	1. 75	(10.3)	暗 灰 色	"	"	″ 4層
450	"	3. 0	0. 7	(0.95)	赤 褐 色	"	約 5 欠	D-1 8層
451	"	(3.1)	0. 9	(2.4)	淡 赤 灰 色	"	"	C-2 9層

土錘(土師質)

土组	〔土師質)						
番号	形 態	長 さ (cm)	径 (cm)	重 量 (g)	色 調	成 形	状 態	出土地点
452	管状	(3.55)	0. 9	(2.7)	灰色~黒色	巻き付け	約 % 欠	C-2 12層
453	"	3. 6	1. 2	(6.7)	黄 橙 褐 色	"	"	″ 8層
454	"	3. 8	1. 6	(8. 25)	淡 黄 橙 褐 色	"	約%欠	〃 9層
455	"	(3.9)	1. 2	(4.8)	黒 灰 色	"	約%欠	" "
456	"	(2.8)	1. 4	(4. 0)	黄 褐 色	"	約 ¼ 欠	" "
457	"	(2.2)	0. 7	(1.0)	暗 赤 褐 色	"	約 % 欠	D-2表土
458	"	3. 3	0. 75	(1.6)	赤 褐 色	"	"	D-1 9層
459	. "	(4.4)	1. 2	(5. 2)	暗 褐 色	"	"	C-2 "
460	"	(3.5)	1. 6	(7. 6)	淡 黄 橙 褐 色	"	"	D-1 "
461	"	(2.7)	0. 85	(1. 8)	赤 褐 色	"	約½残	C-1(西) 表土
462	"	(1.85)	0. 9	(1.05)	"	"	約 ½ 欠	D-1 9層
463	"	(2. 25)	1. 0	(1.4)	淡 黄 橙 褐 色	"	"	C-1(西)・D-1間畦9層
464	"	(2. 25)	0. 95	(1. 6)	暗 褐 色	"	"	C-2 12層
465	"	(2. 15)	1. 1	(1.85)	赤 褐 色	"	"	D-2 8層
466	"	4. 0	(1.7)	(4.4)	暗 褐 色	"	"	C-2 • D-2 間畦 9 層
467	円筒形	2. 85	3. 0	26. 4	淡 黄 橙 褐 色	一方向穿孔?	ほぼ完形	C-2 12層
468	"	2. 35	2. 8	(12. 8)	灰 白 色	二方向穿孔?	約 ½ 残	C-1(西)・D-1間畦9層
469	"	2. 65	(3.2)	(13.05)	赤 褐 色	巻き付け	約 ½ 欠	E-1 4層
470	球 形	2. 3	2. 45	11. 55	淡赤褐色~黄褐色	巻き付け、磨滅	ほぼ完形	D-1 9層
471	"	2. 3	3. 0	19. 45	淡 黄 橙 褐 色	巻き付け	"	C-1(西) 9層
472	"	2. 4	3. 2	21. 05	黄 橙 褐 色	二方向穿孔?	"	〃 8層
473	"	2. 85	3. 2	29. 25	淡 黄 橙 褐 色	巻き付け	"	D-2 8層
474	"	1. 2	2. 0	(3.5)	赤 褐 色	巻 き 付 け ?	約%欠	E-1表土
475	"	2. 95	2. 85	(19. 4)	淡 褐 色	巻き付け,ナデ調整	約%欠	C-1(西) 8層
476	管 状	(2.0)	0. 55	(0.75)	赤 褐 色	巻き付け	約 ½ 欠	F-1 2層
477	"	(1. 95)	0. 75	(0.8)	"	"	"	G-2 5層
478	"	(2. 55)	0. 8	(0.95)	"	"	約½残	G-1 "
479	紡錘形	2. 7	4. 2	46. 8	暗灰色~明褐色	二方向穿孔?	ほぼ完形	F-1 12層
480	管 状	4. 2	1. 3	6. 2	赤 褐 色	巻き付け, 剝離	"	C-3 3層
481	円筒形	2. 9	2. 8	(18. 65)	淡 黄 橙 褐 色	巻き付け	約 % 欠	〃 土器溜り1
482	管 状	3. 95	1. 5	12. 4	茶 色 ~ 明 褐 色	"	ほぼ完形	D-3 SD-01内6層
483	球 形	3. 0	3. 6	(32. 25)	灰 白 色	"	約 ¼ 欠	" "
484	, "	3. 05	2. 6	(14. 9)	黄 褐 色	一 方 向 穿 孔 穿孔部片側扁平	約%欠	C-3 SB-01内
485	"	(2.2)	2. 9	(13. 3)	黄 橙 褐 色	巻き付け	約 ½ 欠	″ SB-01床面
486	"	3. 1	2. 9	(15. 2)	"	" .	約%欠	〃 削平部土器包含層
487	管 状	2. 9	0. 75	1. 3	赤 褐 色	"	ほぼ完形	排土
488	"	4. 0	1. 5	6. 9	暗 灰 色	"	"	"
489	"	(3.3)	1. 0	(2. 9)	赤 褐 色	"	約%欠	"
490	"	(2.3)	0. 7	(0.75)	黄 褐 色	"	約%欠	"
491	"	(2.1)	1. 1	(1.95)	赤 褐 色	"	"	"
492	"	(1.45)	0. 75	(0.65)	"	"	約 ½ 残	不明
493	"	(2.1)	0. 8	(0.8)	"	"	"	排土

土錘(須恵質)

番号	形態	長 き (cm)	径 (cm)	重 量 (g)	色		調	成	形	状 態	出	土 地	点
494	円筒形:	(1. 65)	4. 85		灰	白	色				A-1	3層	
495	球 升	2. 8	3. 2	26. 1	淡	茶	灰 色	一方	向 穿 孔	ほぼ完形	B-1	7層	

土錘(瓦質)

番号	形	態	長 さ (cm)	径 (c	動 重量(g)	色		調	成		形		状	態	出	土 ;	也点	į.
496	管	状	3. 95	0.	2. 85	赤	褐	色	巻	き	付	け	ほぼ	完形	C-2	12層		

その他の遺物

番号	種	類	材		質	形態・その他	出土 地点
29	石	鏃	黒	曜	石	鳅型凹三角形,最大長 2.25 cm,最大幅 1.6 cm,最大厚 0.4 cm	A-1 10層
84	角	釘		鉄		現存長 3.1 cm, 全面錆	B-1 4層
85	筒型鈔	失製品		"		現存長 1.6 cm, 最大径 0.9 cm, 全面錆	A-1 7層
164	石	鏃	黒	曜	石	鍁型凸三角形,最大長 2.4 cm,最大幅 1.95 cm,最大厚 0.5 cm	E-1 17層上面
276	古	銭				『寛永通宝』,裏面「文」,遺存状態良好	F-2表土
389	瓦	?				印花文有	排土



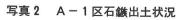




写真 3 E-2区電片出土状況



昭和60年度発掘調査前近景 (西から東方谷間入り口 方向を見る)



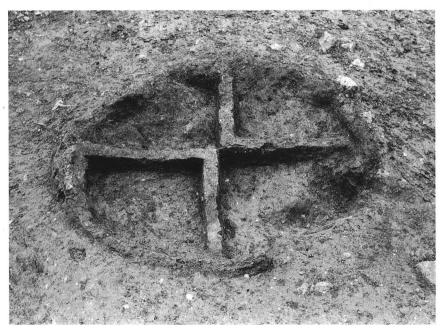
昭和60年度発掘調査風景



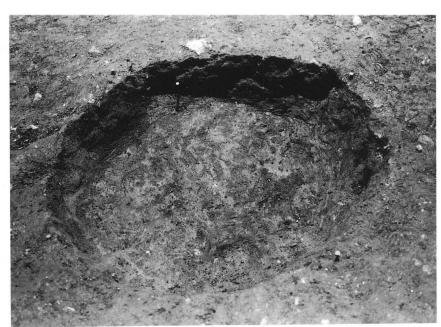
B-1・C-1(東)区間 畦内土馬出土状況



A-1~C-1(東)区第1 遺構面(A-1区南側は第 2遺構面)



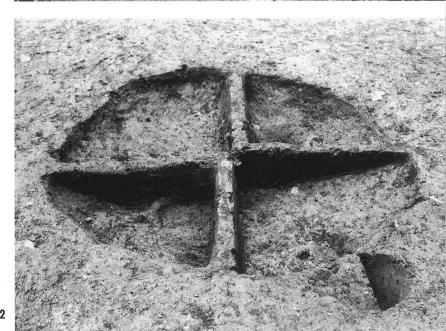
A-1区SK-01



 $A-2\boxtimes SK-06$



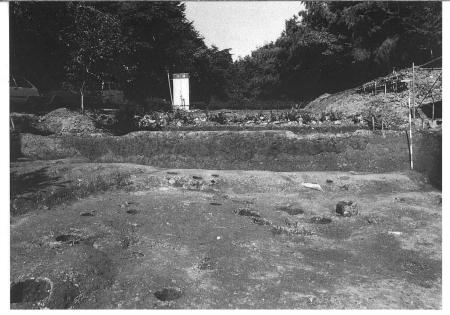
A-1~C-1(東)区第2 遺構面(西から見る)



A - 1 ⊠S K - 0 2



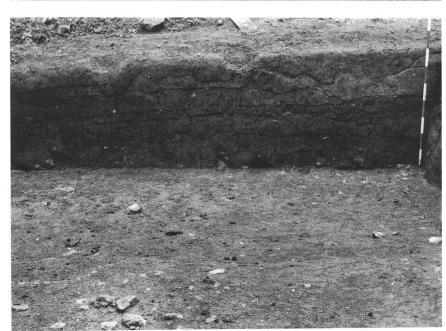
B-2区第3遺構面



B-1区西壁



B-2区西壁



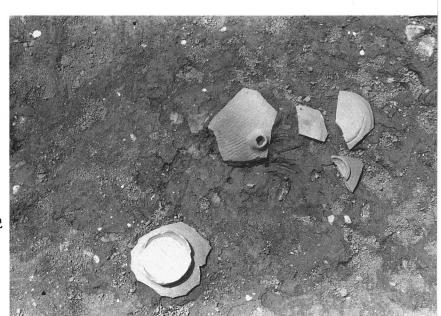
A-2区東壁



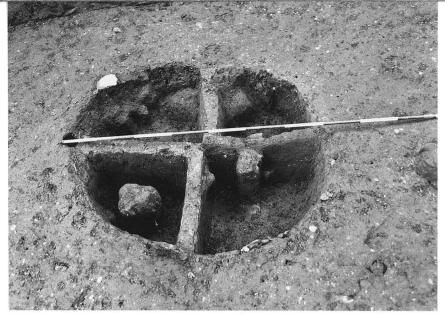
C-1(西)~E-1区 第1遺構面



D-2区第1遺構面



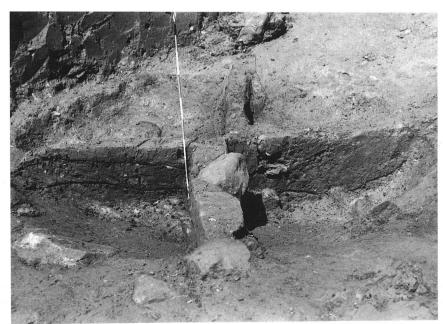
D-2区第1遺構面 土器出土状況



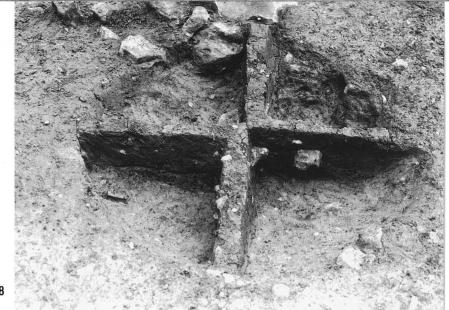
D-1⊠SK-03



D-1区SK-04



E-2区SK-07



 $D-2\boxtimes SK-08$



C-1(西)~E-1区 第2遺構面



D-1区第2遺構面 P1長頸壺出土状況